

ダンスを踊り龜井時事亦兩手を振りて體操踊りを始めた、横川は庭前に飛び出して満開の牡丹花を手折り之を拈しながら南部の馬踊りを踊つた、斯くて興湧き和氣霽々として主客共に歡を盡くして散會したるは實に夕暗の迫らんとする時であつた。

那桐の招宴は單に日本記者團に止らなかつた、彼は倫敦タイムスの北京通信員モリソン其他の外國記者をも招待した、同時に英國公使館通譯官ミユルレルを招待して英國側の歡心を買ふことに勉めた、ミユルレルと言へば支那通として有名な英人で支那文は勿論支那語の如き殆んど支那人同様であつた、那桐はミユルレルを通じてマクドナルド公使に接近せんとしたるも、剛直なる公使は容易に私的接近を許さなかつたといはれて居る。

北京郊外に白雲觀なる道教の本山が在る、此の白雲觀は廣大なる庭園あり四時參拜の内外人絶えずして頗る繁昌し宮廷との關係も淺からぬのである、貫主劉道士は教界に威望高きのみならず俗界に於ても勢力を有せる一種の傑僧であつた、西太后の如き最も劉道士を尊信せられ時々宮中に呼び入れて其の説教を聽聞さるゝことがある、親王福晋(妃)其他貴婦人間に劉道士信者の多いことは、隠れもない事實であつた、白雲觀に出入する貴婦人少からざる爲め、種々の風聞傳はり或は魔窟を以て目せられたる位であつた。

宮廷の大官李蓮英と白雲觀の劉道士とは共に西太后の御覺え目出度いので、其潜勢力頗る大なるものがあつた、左れば當時宮廷内の秘密を知らんとせば、勢ひ李や劉を通じて之を探らなければならなかつた、西太后を動かさんとせば、李及劉を動かさざる可からずとは内外に私語されたる處で、王公大官等と雖も李劉を恐れたる位であつた、露國

公使の如き逸早く白雲觀に參詣して劉道士に接近したるが獨逸公使も亦白雲觀出入の一人であつた、其他英國公使館のミユルレル譯官の如き又はモリソンの如きも白雲觀出入の仲間と爲り我内田公使は劉道士よりも寧ろ李蓮英を懐柔しつゝあつた、然れども白雲觀の潜勢力は我公使館に於ても之を度外せなかつた、則ち横川省三をして白雲觀に出入せしめ島川をして李蓮英を引受けしめた、横川は時々白雲觀に遊んで首尾好く劉道士に接近するに至つた、彼は劉道士接近策に就て種々考案する處あり一日北京第一樓(邦人旗亭)の女中頭を梅及藝妓等を伴ひ白雲觀に遊び同觀名物の精進料理を會食した、一室に陣取れる横川一行は携へ來れる和洋酒を飲み且つ三味線を弾かして藝妓を踊らしめたのであつた。

斯の珍事は忽ち道士等の耳目を驚かし遂に劉道士自ら實況檢分に現はれた、茲に於て横川は騒ぎを止め室内を整へ恭謙の禮を以て劉道士を迎へ入れたのである、身は道教の高僧ながら人一倍俗界の快樂を好める劉道士は意外なる日本人男女の歡待に内心頗る悦に入つた、彼は自ら觀内の庭園を案内して横川一座に見せしめ、更に自室に請じて茶菓の饗應を爲した、彼れ横川に耳語して曰く、

『兄弟、不日城内に君を訪ふから日本料理と紅裾踊りを馳走して呉れ』横川の白雲觀進撃は物の美事に成功した、三味線の音聲と藝妓の白足袋とは何の苦もなく劉道士を捉ふることゝ爲つた、爾來横川と劉道士とは親交を重ねたるは勿論、時に公使館の特殊別荘たる棠蔭精舎に其姿を見出すこともあつた、之が爲め北京宮廷の内情其他に就て劉道士を通じて探知したること少からず、我公使の外交問題其他に樞要なる材料を供したのであつた、而も之れ横川省三の隠れたる努力に因れ

りと言はざるを得ない。

夫れ斯くの如く北京の情勢は内外各方面に於て、幾多の暗流あり種々複雑なる事情あり、甲乙の外丙丁に關係せる事情もあれば、甲丁と乙丙の關係に涉れることもあつた、日英米三國間に三國特殊の利害關係もあれば、露獨佛三國間夫れ夫れ相反せる利害關係もあつた、北京宮廷内に於ても西太后派と光緒帝派の對抗あり、外務部や軍機處や吏部禮部などにも幾多の暗流ありて、其真相を知り其關係を悟るが如き、實に困難を極めたものであつた。

横川省三は内田公使の爲め斯る困難なる使命を引受けたのであつた、彼は日夜心身を投げ出して内外各方面に活躍した、英米露獨人間にも出入してプロクン英語を臆面もなく使用した、支那人間にも出入しては半解の北京語と岩手ナマリ日本語を交へて談笑した、勿論不愉快

なる場合を迎へたこともあらう、イヤな思ひに我れと我れを鞭打つたこともあらう、内外役人等の高慢チキに憤慨したこともあらう、然れども横川は一心一向内田公使を援けんことに直進した、國家の爲め私心を抑制して奮闘した、波瀾百出の北京政界に乗り出したる彼は寧ろ一生の働らき時代として満足しつゝあつたことと思ふ。

露西亞の滿洲占領

義和團事變の爲め北支那出兵の列國は和平回復と共に、夫れ々軍隊を撤退することゝ爲つた、列國中最も多く出兵して北京籠城の列國官民を救出したる日本の如きは逸早く第五師團全部を内地に引揚げたのであつた、米國も英國も佛伊其他も善後議定書に規定されたる所定の兵數以外、全然本國若くは殖民地に引揚げて國際信義を表示した、

然るに獨り露西亞に至つては滿洲一帯を占領したる儘、容易に撤兵する模様なく却つて永久占領の準備を進めつゝあつた、露國は義和團事變を口實に續々大兵を繰り出し山海關内一帯を占領するのみならず大石橋營口溝帮子錦州其他に武裝工事を施し且つ露國市街を設定して永久占領の野心を示したのである、露國は日清戦争の平和成立に際し獨佛と共同して所謂三國干渉を試み遂に我邦をして遼東半島を還附せしめた、然るに間もなく清國に迫りて遼東半島を租借し、更に東清鐵道の哈爾濱より南下して大連旅順に到る一大鐵道を布設したのであつた、然れども露國の野心は東三省全部を支配せんとするにありしが故に單に旅大の租借、南滿鐵道布設に満足することが出来なかつた、機會だにあらば滿洲に巨腕を延べんことを覗ひつゝあつた、恰も好し義和團事變の發生するあり、列國は北支那出兵を決行し日本の如きは

二萬有餘の軍隊を出動せしむるに至つた、茲に於て露國は東部西伯利軍團を出動せしめ更に歐露本國より續々軍隊を繰り出して南部滿洲は勿論山海關を越えて蘆臺附近まで占領状態の下に置くに至つたのである。

露國の大出兵は北京救援の目的にあらずして、實に滿洲占領の爲めであつた、北京救援を第二次的と爲せるを以て露國軍隊の北京進撃は其兵力に於ても其戦闘に於ても、日英兩軍に及ばなかつたのである、然れども露國は軍事的成功よりも政治的成功を望める爲め、首尾好く滿洲各地を占領して政治的野心を遂行することゝ爲つた、列國は北支那より各自軍隊の大部分を引揚げたるも、露國は山海關以内に於て一兵をも引揚げなかつた、遂に軍隊を引揚げざるのみならず、恰も露國領土に對するが如く旅順の武裝を始め各要地の武裝工事を進め且つ堂々

たる市街經營を各地に設定して遠大の企圖を示したのである、アレキ
シーフは新に極東總督に任ぜられ旅順に總督府を置き公然滿洲一帯
を支配するに至つた、實に露國の態度や傍若無人と言はざるを得な
かつた、日本は先づ驚いた、英米も露國の横暴に驚いた、獨逸と佛國は内心
驚きながらも表面冷然として傍觀した、内憂外患に心氣轉倒したる北
京朝廷と雖も餘りの事に奮然起つて抗議を提出した、支那國民は北京
朝廷の後援と爲つて露國の撤兵を叫んだ。

流石の露國も強硬なる支那側の抗議に對しては、勢ひ何んとか色を
附けざるを得なかつた、無論露國は列國及支那の反對を豫期しつゝあ
つたので、今更ら驚くが如き弱腰ではなかつた、彼は表面丈け妥協に應
ぜんとする様子を示せるも、其決心は何等の動搖なく依然たるもので
あつた、露西亞は内外に山海關外に撤兵す可きを宣言し蘆臺から秦皇

島山海關間の軍隊を引揚げたのであつた、然れども斯る撤兵は特に内
外に宣言するの必要なく當然撤兵す可き撤兵に過ぎなかつた、何んと
なれば北京天津間及天津山海關の鐵道線路は列國の協定に由り日英
米佛伊奧各國軍隊に於て分擔守備することに定まれる爲めであつた
實に露國の撤兵宣言は内外を愚にせるもので北京政府が更に嚴重な
る抗議を提出したるは當然の成行であつたと思ふ。

日本は露國の滿洲占領に關し靜かに其成行を傍觀しつゝあつた、然
るに露國の滿洲占領は單に滿洲占領のみに止まらない情勢を見るに
至つた、露國の野心は朝鮮國境をも支配せんとする企畫であつた、鴨綠
江兩岸の大森林は勿論間島方面より長白山一帯を經營し更に朝鮮國
内の龍巖浦を占領して軍事的設備を行はんとする様子であつた、否な
既に着々其企畫を進行せしむるに至つた、則ち露國極東總督アレキシ

一フは滿洲と共に朝鮮半島を支配し一舉日本を壓伏せんとする一大陰謀の實現を期しつゝあつたのである、實に之れ支那の國難のみにあらずして、日本に取りりても一大國難であつた、日支兩國は協力提携して露西亞に當らなければならぬ危局を迎へたのである、否な日本は北京政府を後援して露國の撤兵を要求すると共に、場合に依りては日本單獨にても露國と對抗せざるを得ないかも知れない、十年間の「臥薪嘗膽」はいよいよ其機會を迎へて一大國難を突破せざるを得ないことゝ爲つた、我内田公使は本國政府の重要訓電に接し茲に表面に現はれて北京外交の花形役者たるに至つた。

日本は露國に向つて直接交渉を開始する以前、先づ北京政府を支持するの態度を採つた、北京政府を援けて最も強硬に露國の滿洲撤兵を要求せしめた、慶親王那桐等は袁世凱張之洞等の建議と日本の支持とに由り露國に向つて撤兵を要求し其の確答を促した、北京政府の態度は頗る強硬であつた、滿洲は清朝發祥の神聖なる地方である、愛親覺羅氏の舊都と太祖以下の墓陵とを有し北京朝廷の特別保護地と爲つて居る、而も滿洲各地に於ける王公貴紳の所領地は其の重要な財源である、斯る由緒を有し且つ北京王公貴紳等に多大の利害關係ある滿洲なるが故に、北京朝廷の斷然たる態度を採れるは實に當然の次第であつた、況んや日英兩國の支持を得つゝあるに於てをや。

露西亞に於ても勢ひ何等かの回答を爲さざるを得なかつた、レツサル公使は本國政府及極東總督アレキシーフと協議の上いよいよ滿洲撤兵に關する通告を爲すことゝ爲つた、露國公使より北京政府への通告に依れば、露西亞は東三省各地の不穩状態に鑑み其軍隊を三期に分つて撤兵す可き旨を約束した、則ち第一期は山海關營口間の撤兵、第二

期は營口大石橋海城遼陽各地及び奉天間の撤兵を行ひ、第三期に於て奉天以北の撤兵を行ひ以て滿洲占領以前の兵數に止む可き旨を聲明したのであつた、然れども撤兵に伴へる幾多の保留條件を附し或は鐵道線路守備の増加を計り、或は各主要停車場に廣大の土地を附屬せしめ以て露國市街の建設及び軍事的防備工事を施すなど、殆んど有名無實の撤兵を試みんと欲したのであつた。

北京政府は露國の撤兵約束に對し靜かに其實行如何を觀望するこゝとに決し、其保留條件の如きは撤兵後の交渉に譲る可き旨を通告して露國の考慮を促した、明治三十五年の九月、露國は約の如く其第一期撤兵を實行した、則ち山海關營口間の軍隊を引揚げたるが、是等の引揚げ軍隊は之を滿洲以外に輸送せずして大石橋海城各地に駐屯せしめたるに過ぎなかつたのである、露兵の引揚げたる山海關營口間に於ける

露國の經營狀態は實に永久占領の事實を語るものであつた、昌黎錦州其他各主要地に於ける露國市街の建設計畫及び兵營練兵場、寺院墓地等の經營は勿論永久的砲臺の建築など、眞に雄大なる計畫を示したのである、若し露國にして猶ほ二三ヶ年同地方を占領したらんには、其經營は牢として抜く可からざる基礎を確立したるや察す可しであつた、幸に第一期撤兵を實行したるを以て、山海關營口間の經營未だ半ばならずして再び清國の手に歸するに至つたのであつた、同時に露國側に於ては折角我が物に爲さんとして、之を清國へ還附せざるを得ざりしことを残念に思へるや當然であつた。

第一期撤兵を實行せる露國は内外に向つて露國の公正なる態度を聲明して自畫自讚する處があつた、北京政府に對しても露國公使レツサルは露清國交の親密なる徵象として之を通告し、更に露國は清國の

友邦として共に兩國の利福増進に熱心せんとする旨を提唱したのであつた、北京朝廷内の露國派は第一期撤兵の實現を機會に最も熱心に親露的運動を試みて其勢力の扶殖を計つた、當時西太后の如きも露國派の爲め動かされ、日英よりも寧ろ露西亞に傾かれたる位であつた、然れども第二期撤兵に至つて露國は其の本來の面目を示した、則ち營口奉天間の撤兵は其期限たる明治三十六年三月に到るも全然之を忘れたるが如き態度であつた、北京政府は再三其の實行を迫れるも露國は言を左右に託して容易に撤兵する様子がなかつた、嘗に撤兵せざるのみならず、大石橋海城其他の要地に着々武装工事を進め且つ市街經營其他の施設を以て永久占領の覺悟を示しつゝあつた。

日本はいよゝゝ表面に現はれ直接露國に抗議を提起するに至つた、北京政府も滿洲の實況を知り更に強硬の態度を以て嚴重なる抗議を試みるに至つた、日本政府は露國に抗議すると共に内田公使に訓電して北京政府の奮起を促さしめた、茲に於て内田公使は館員及横川等をして滿洲及朝鮮國境の露國經營状態を踏査せしむると共に、北京朝廷に向つて對露方針の嚴ならんことを勸告した、外務部尙書那桐は再三露國公使レツサルと談判したるも、容易に要領を得ることが出来なかつた、露國は獨り支那のみならず、日本の態度も頗る強硬なるを知り、營口の軍隊を引揚げて大石橋に移動せしめ以て一時逃れの口實を作つた、而も大石橋以北の露兵は却つて其數を増加し益々軍事的工事其他の經營を進むることゝ爲つた、旅順一帶の要塞は着々工事を進め其武装は頗る嚴重と爲つた、大連金州其他の經營は益々擴大され全然舊時の面目を一新した、極東總督アレキシーフは露國皇帝より特に過大の權限を附與せられたる爲め、着々其企畫を遂行した、彼は滿洲占領に滿

足せず遂に朝鮮國內へ其魔手を延ばし先づ龍巖浦一帯の經營に着手したのであつた。

左なきだに露國の滿洲占領は東洋平和の一大脅威である、而も更に朝鮮國內に侵略的行動を採るに至つては、實に之れ日本の一大國難である、日本に對する露骨なる壓迫態度である、疑ひもなき朝鮮侵略である、朝鮮にして一朝露西亞の勢力下に置かれんか、日本帝國の存亡に關する一大外患である、露國の龍巖浦侵入は之れ明かに日本に對する挑戦であつた、日本豈に座して危急の到るを待たんや、茲に於て日本政府は露國政府に向つて滿洲占領は東洋平和の脅威なる旨を述べ其撤兵を要求したのであつた、露支外交は一轉して日露外交と爲つた、日露外交の激する處、遂に砲火の間に相見えざるを得ないことゝ爲つた、而も日支兩國提携の緊要なりしに拘らず、動もすれば支那側の方針動搖し我れを離れて敵に接近せんとする傾向あり、實に北京外交界の情勢は寸分の油斷を許さなかつたのである、内田公使以下公使館員は勿論島川横川小村等の面々は支那側に向つて最も熱心なる活動を試みたのであつた。

横川省三の使命は内田公使の方針に従ひ北京官界の有力家や北京支那新聞の記者間に運動して我邦と支那との提携を密接ならしむるにあつた、日支の利害一致することを悟らしめ日支協力して露國に當らざる可からざる所以を宣傳するにあつた、日本が露國の撤兵を要求することは則ち支那の意志を體する所以を知らしめ飽くまで日支共同の必要なるを會得せしむるにあつた、若し一朝日露開戦の場合は支那側の參戰を要せざるも間接の支持を爲して日本の戦勝に資するの當然なるを覺悟せしむるにあつた、然れども露國公使以下同館員其他に

於ても日本に劣らざる熱心を以て支那側に運動して露支接近に努力し居れるや勿論であつた、左れば當時の北京は日支露の三國入り亂れて奮闘せるは勿論、英米は日本を佛獨は露國を支持して、暗闘又暗闘非常の混戦を示したのであつた。

斯る激烈なる外交戦場に於て、彼れ剛毅なる横川は日夜各方面に活躍し意氣いよく、昂然其使命を全ふせん事を期した、彼は金魚胡同の那桐宅に出入せるは勿論、白雲觀を訪ひ又は雍和宮の僧正林欽尼馬と會談して裏面の運動に熱心した、慶親王を動かさんとせば先づ其愛兒たる振貝子を動かさねばならぬ、振貝子を動かさんとせば先づ其第三夫人たる林姑娘を動かさねばならぬ、林姑娘を動かさんとせば先づ其乳母某を抱き込まなければならぬ、斯んな事情を知れる横川は其道筋を辿りて遂に振貝子を動かすに至つた、振貝子既に動ける以上、慶親王

の意向は無論動けるや察す可しであつた、元來慶親王は殆んど自己の意見を有せず常に振貝子に聽いて其意向を定むる後入齋であつた。支那新聞記者仲間を操縦するに就ては内田公使以下頗る苦心を拂へるのであつた、島川横川小村の三人は主として記者團(日支の)操縦に努力したるが特に支那記者に對しては特殊の運動(或は買収とも)を探りつゝあつた、然れども斯る特殊運動は頗る老巧を要するので寧ろ横川の得意とする處であつた、彼は幾多の苦心と不眠不休の努力を以て日支提携の實現を促し大敵露西亞に對抗して滿洲撤兵の主張を貫徹せんとした。

主戦論と官民一致

露西亞は第一期撤兵を實行したるも第二期撤兵を行はず、却つて滿

洲各地の武装工事を進め且つ朝鮮國內に侵入した、茲に於て滿洲及朝鮮國境の實況如何は内外の齊しく注目する處と爲つた、我公使館附武官山根少將は南北滿洲視察の途に上つた、北京特派員等も滿洲に於ける露國の占領状態視察の爲め出張した、内田公使は特に横川省三に命じて滿洲及朝鮮國境を踏査せしめたのであつた、横川は微行して出京したるが無論内田公使と二三名以外彼の行衛を知らないものであつた、後日彼の語れる處に依れば彼の視察旅行は南北滿洲より朝鮮國境に及べるが、就中龍巖浦の如き最も詳細に視察したのであつた、彼は安東縣を経て歸途山東省芝罘に立寄り當時の領事水野幸吉の歡待を受け、恰も滿洲視察を終へ旅順より芝罘に渡れる時事龜井日日松島の兩記者の來會せるあり、水野領事大に喜んで曰く、

『志士三雄を迎へたるは我輩の最も満足する處である、三雄滯在中は我輩の賓客として酒は飲み放題に騒ぐことも勝手たるべし、但し〇〇は各自の自腹とす』

固より三人は〇〇よりも徳利を抱いて酔臥するを喜べる左手黨である、水野領事の賓客待遇に安心して大に飲み大に騒いだ一夕某旗亭に水野領事と會合して時局を論議した。

『露國の滿洲占領は朝鮮半島侵入の前提に過ぎない、多年の野心はコンスタンチノープル進出と朝鮮半島侵略とであつた、今や露國は西より東方へ進路を見出した、彼れ豈に容易に滿洲を撤退せんや、想ふに日露戦争は勢ひ免る可からざる成行である、我輩は主戦論を主張すると共に戦争速開を叫びたいのである』

水野領事は日露開戦の已む可からざるを論じ、寧ろ一日も早く開戦するの我日本に有利なるを主張した、水野の快辯は有名なものであつ

た、一座は其快辯に壓せられんとした、而も龜井横川の兩人、敢て沈黙を守り、守るほどの凡物にあらず、龜井先づ應じて曰く、

『余も亦大體に於て水野領事の意見に同意である、余は今回親しく滿洲各地を視察して露國の遠大なる經營に驚かざるを得なかつた、遼陽の如き大石橋の如き實に堂々たる大市街を建設せんとし、着々工事中である、旅順の要塞は最新式の築城工事を進行中で遠からず完成の筈である、大連の如き不凍港を得たる露國は必ずや東洋の主人公たることを期し、朝鮮を支配し更に日本を壓伏せんとすること、察す可しである、日本國民はいよゝゝ危急存亡の秋を迎ふることゝ爲つた、上下一致官民協力以て此の大難に當るの決心を促さざるを得ない』

終始黙々として謹聽したる横川は例の巨口を開らざる微笑しながら

所感を述べて曰く、

『龍巖浦に往つて露國の大計畫に驚いた、マサカ朝鮮内に侵入して我物顔に振り舞ひ居れりとは豫想せなかつた、露國は鴨綠江沿岸の大森林を經營する爲め、大仕掛けの計畫を以て採伐工事に着手中である、安東縣及び對岸の新義州に於ても廣大なる土地を占めスラブ市街を建設せんとし既に準備中であつた、滿洲及朝鮮に對する露國の大發展は無論東洋平和の一大脅威である、我日本に取り一大危難と言はざるを得ない、日本は國家存立の自衛上斷然起つて戰爭を開かねばならぬ、然し日露兩國の國力及戰鬥力を比較すれば、到底彼れに打ち勝つ可き見込みがないと思ふ、コソ我輩一己の意見でなく軍事専門家連の齊しく唱ふる意見である、我輩も結極は主戰論者の一人であるが、支那側の情勢に鑑み我日本の現狀に考へ出来る丈、戰

争を避けたいのである、滿洲に關する日露の協商は必ずしも不可能ではあるまいと思ふ、然し表面飽くまで強硬の態度を採り主戦論を高調して一は以て露國を反省せしめ、一は以て「臥薪嘗膽」の我國民をして益々緊張せしめなければならぬ、我輩の主戦は平和を望むが爲めである、然れども露國の壓迫愈々甚太しく、戦ふも負け戦はざるも國家の危急に陥る場合は、日本男兒として斷乎起つて戦ふのみである、我輩豈に戦ひを恐れんや』

斯くて芝罘の愉快なる滞在數日にして横川龜井松島の三人は同船しつゝ塘沽に上陸し共に北京に歸つたのであつた、船中三人は種々意見を交換したるが、横川の主張を容れて左の通り協議し之が實行を期することゝ爲つた、

『北京在勤の我々新聞記者は時局の重大なるに鑑み一致結束して主戦論を高唱し以て我國民の一大決心を促すことに努力せんことを期す、若し内田公使にして同意見なるに於ては同公使を支持するを辭せず』

北京に歸れる横川は其視察の結果を内田公使に報告すると共に、記者團の意見を纏めて主戦論を高唱せしめんとする旨を内報する處があつた、内田公使は各方面の情報に由り且つ自己の所見を考慮していよく主戦論を採用するに決した、横川と龜井及松島等は同業者間に遊説して漸次主戦論に一致せしめたのである、一夕内田公使は横川等の希望に應じ、其官舎に記者團招待の晚餐會を開催した、招待に依り參會したるは牧朝日(龜井時事)梁田(毎日)松島(日日)井深(國民)尾崎(報知)中島(順天)大和(北日)及島川横川等の面々であつた。

時は滿洲撤兵問題を中心に日支露三國の外交戦いよく激烈と爲

れる際であつた、内田公使の晩餐會は珍らしくも公使夫人出席の爲め表面頗る和氣洋々なるも何んとなく緊張の面地が見へた、言ふまでもなく當夜の宴會は最も意義深き會合であつた、内田公使は快活に所感を述べて曰く、

『時局は諸君の知らるゝ通り實に重大と爲りました、私は最善の努力を以て職責を盡くしたいと決心して居りますが、コレも諸君の御援助に待たざるを得ません、私は國家の危機に際し諸君と共に提携して公私共に腹藏なき意見を交へ、以て我邦の利福を計りたいと思ひます、諸君も御遠慮なく意見を述べ又質問を爲して下さい、私は諸君の人格を信じ許す限りの説を述べ又情報を漏らし、諸君を通じて我國民に告げんことを欲するのであります、申すまでもなく諸君の責任は重大で諸君の電報及通信は世界的影響を與ふるのであります、

我公使館と諸君との提携は時局重大の際、實に邦家の爲め衷心喜びに堪へない處であります』

誠心誠意にあらざれば、他人を感動せしむることが出來ない、内田公使の挨拶は如何にも誠意の溢れたるものがあつた、記者側一同は期せずして好感を抱いた、朝日特派員牧放浪は記者側を代表し謝辭を述べて曰く、

『内田閣下並に夫人、私共は平素多忙の爲めユツクリ御目にかゝることが出來ません、従つて常に欠禮勝ちであります、然るに唯今閣下の言はるゝ通り、時局は最も重大であります、私共は過日來横川君其他と意見を交へつゝありましたが、斯の邦家存亡の秋に際しては、協同一致以て國家國民の爲め奉公致すことに決定したのであります、官民一致以て國難を迎へて一大敵國に當らざる可からざるを感じた

のであります、私共は此の際私心を擲ち私共の有する通信の利器を内田公使の御使用に提供致しても差支へないことに協議したのであります、私共は今後公使の室に出入し共に俱に時局問題を研究致したいと思ひます』

北京勤務の我新聞記者は滿洲問題其他に關し或は電報又は文章通信を以て盛んに各自の新聞紙上に通信した、朝日、時事、大阪毎日及東京日日の各特派員は殆んど電報料に制限なかりし爲め間斷なく長文の電報を發送したのであつた、朝日の如きは一ヶ月の電報料五六千元に上り日日も亦五千元以上を示した位いで、其他各社の電報料も亦三、四千元に上つたのである。勿論現下の海外電報から見れば頗る少額なるが如きも二十五年前の新聞電報としては未曾有の金額であつた、北京に於ける各特派員は一定の俸給と共に住宅料交際費探訪費などを給

せられたるが故に、電報料以外の經費は毎月少くも二、三千元を要し取て公使館員及顧問等に劣らない社交的地位を占めつゝあつた、左れば是等の特派員及記者を味方と爲せる内田公使は内外活動の上に少からざる便益を得たるや勿論であつた。

内田公使と我記者團との握手接近は、日露開戦を促すに多大の効力を與へた、東京大阪の八大新聞は北京電報として滿洲及朝鮮國境に於ける露國の侵略的狀態を掲げ且つ旅順其他の武裝工事非常の勢ひを以て進行しつゝあることを報道した、日露の開戦避く可からずとせば一日も早く開戦するの日本に有利なる事情を掲げ、更に北京外交界の暗流に我邦に不利なる傾向ある次第を詳報して我邦上下の一大決心を促したのであつた、内田公使も亦横川及各武官の視察報告に基き滿洲に於ける露國の軍備狀態及び朝鮮國境に對する露國の經營振りを

我外務省に報告すると共に寧ろ主戦論に賛成せざるを得ざる旨を主張して我政府の参考に供した。

公使館附武官山根少將は再三自ら滿洲各地を視察して其結果を我が陸軍當局に報告しつゝあつた、然るに當時の參謀次長兒玉源太郎大將は山根少將に對し日露戦争に關する意見を求めたのであつた、勿論極々の秘密であつた、後年山根將軍の語れる處に依れば、當時將軍は左の如き意見を兒玉次長に電報した、

『日露戦争に關する本官の意見は到底勝算の見込みなしと言ふにあり、既に勝算なし、果して然らば座して露國の爲すがまゝに任かす可きか、座して露國の爲すがまゝに任かせんか、我日本は露國に壓伏せらるゝに至らん、既に壓伏せらるゝとせば、寧ろ一戦を交ふるに如かず、戦ふも不利、戦はざるも不利なりとせば、日本男兒の面目を發揮して一戦を試み勝敗を度外して彼れに痛撃を加へざる可からず、茲に於て本官は主戦論を主張せんとす、既に主戦を主張す、須らく兵略上朝鮮半島に我軍の兵力を集中せざる可からず、朝鮮半島の兵力集中は、之を京釜鐵道の輸送に待たざる可からず、京城釜山間の鐵道を速成するは最も急務なりと信ず』

山根將軍の意見は直に我が陸軍當局に採用せられ、間もなく兒玉將軍より左の如き電報は山根武亮少將の手許に届いた、

『貴官の意見を採用す、貴官は朝鮮鐵道總監に任命せらるゝことに内定す、貴官の後任として青木宣純大佐を任命せんとす、貴官に異議なきや否や』

斯くて山根少將は自ら建議したる京釜鐵道速成の爲め朝鮮鐵道總監に榮轉したるが、其後任として青木大佐の北京公使館附武官は山根

少將も頗る満足せる任命であつた。

北京在留邦人に於ても時局の重大なるを悟り、平素の反目鼎立を忘れて殆んど一致協力したのであつた、日露間の風雲危急と爲れるを知り報國盡忠の赤誠に燃へたのである、大學派の面々は各自の縁故にて探れる種々の情報を公使及武官に内報し、警務學堂派も亦支那官界其他の情報を探りて之を公使館に内報し、以て當局の参考に供したのであつた、在留邦人の有志等も亦種々聽き込める情報を公使館側に知らせ若くは注意を促し、各旗亭の婦人でさへ時局に關する支那人客の談話を注意し苟も必要なりと考へたる情報は之を記者又は公使館員に密告するを怠らない位であつた。

新聞特派員及記者等に於ても亦其の探訪せる幾多の材料中、事苟も緊要なりと認めたる事柄は悉く之を内田公使の参考に供したのであつた、斯く官民一致の態度に出でたるは時局重大に因れりとは言へ、抑も亦島川横川等の其間に斡旋して官民融和に努力したるに由らざるを得ない、實に記者團と内田公使の接近を計れるが如きは、横川の北京に於ける功勞中最も卓越なる功勞であつた、隠れたる横川の奉公振りや眞に志士の模範である。

長江視察と蒙古縦斷旅行

是より先き内田公使の北京に在勤するや、先づ支那各地の形勢を調査研究するに決し、各地在勤の總領事及駐在武官に向つて其報告を求めつゝあつた、是等の報告は無論多大の參考資料と爲つた、然れども公使は特に横川省三に内命して長江一帶の視察調査を行はしむることゝ爲つた、彼は大陸旅行の途に上り先づ北京より漢口に赴き更に上流

に遡つて四川省に入つた、四川省は支那各省中の大省で而も富源に於ても屈指の地方である、當時の四川總督陶模は横川の來遊を喜んで特に總督府の午餐會に招待した、陶模は廣湖總督張之洞兩江總督劉坤一に次げる古參總督にして、其人物亦頗る傑出して居た、四川の首府成都は遠く北京を離れたる爲め義和團事變の影響もなく、殆んど天下太平の状態であつた、彼は陶總督との會見及視察に就て幾多有益の材料を得たのである、四川に於ける彼の獲物としては先づ日本汽船の四川航路開始に關する計畫であつたと思ふ。

横川は漢口より四川の重慶に遡る旅行に於て其交通の不便と汽船の不完全なるに驚いた、彼は陶總督との會談に當り是等の所感を述べたるが、陶總督は意外にも彼れに對し日本汽船の重慶航路を希望して曰く、

『長江交通の不便は余も亦之を認めて居る。而も支那の現狀に在つては到底支那人の手にて新式汽船の航路を開始することが出來ない、上海漢口間は既に英國其他及び我が招商局汽船の往來するありて、頗る便利と爲つた、然るに漢口と重慶の間は未だ英國などの航路開始を見ない、余は日支親善の爲め、日本汽船の四川航路開始を希望して已まない、或は日支合辦の一汽船公司を創設するも亦好都合であると思ふ』

如何にも立派な意見である、開國進取の大企業である、流石の横川も見掛けに由らない陶總督のハイカラ意見に驚かざるを得なかつた、心中深く驚異すると共に日本の對支發展として最も適切なる考案なることを信じたのであつた、當時彼は唯だ陶總督のハイカラ意見に共鳴したに過ぎなかつたが、後日其の意見を内田公使に報告した、此の報告は

單に公使の參考に供せられ其儘反古と爲れるやも知れないが、兎に角横川の意見は、後年日清汽船會社の四川航路開始として實現せらるゝに至つた。四川省に旭日旗を翻へせる船舶の往來を見るに至れるは、實に其淵源を横川と陶總督との會見に遡らざるを得ないのであつた。横川は四川視察を終へて湖北省の漢口に下りて同地一帯を視察した、有名なる黃鶴樓に登り對岸漢陽府を望んで張之洞の新事業を想察した、漢陽の鐵工廠や兵器製作所は張之洞の事業として支那唯一の呼び物であつた。漢口武昌漢陽の三大市街は長江に跨れる中部支那の一大商業地である、日本の如き大に發展せざる可からざるを感じたる彼は、同地滯在一週日の間に各方面の事情を調査した、斯くて長江の流れを下り上海に寄航し更に同地より海路青島に赴いたのであつた。青島は當時獨逸の東洋發展に對する根據地であつた、獨逸は青島經營

に熱心して殆んど模範的殖民地を建設するに至つた、而も獨逸は青島一帯の經營に満足せず、義和團事變を機會に山東省の一半を支配せんことを欲した。膠濟鐵道の布設は勿論、各地の鑛山開發及び製造工業の創設を企畫し、着々之が實現を遂行せんとした、然るに滿洲問題を中心とする日露の交渉、險惡と爲れるを以て獨逸は心竊かに露國を支持して何等かの好餌を獲んことを期するに至つた、日本に取りても獨逸の態度は最も注意を拂はざる可からざる次第であつた、内田公使が特に横川の青島視察を内命したること決して偶然ではなかつたのである、横川は青島に上陸して獨逸の經營振りの雄大なるに驚いた、青島市街の設立計畫は如何にも獨逸式の壯大雄麗なものであつた、周村其他の地方に於ける經營も亦頗る永遠的計畫の下に進行中であつた。

歐羅巴に於ける露獨の關係は、露佛同盟に對する獨逸伊三國協商と

して必ずしも提携の間柄ではない、然るに東洋に於ける露獨は三國干渉の提携以來、依然として提携を繼續し居れるやの形跡がある、若し日露間に開戦を見るに於ては獨逸は當然露國を支持するであろうと想はれたのであつた。滿洲に於ける露國の野心を阻止すると共に青島に於ける獨逸の形勢を知らざる可からざりしは、我邦として當然の次第であつた、則ち横川の青島視察は内田公使の最も重要視したる處であつた當時青島に於ける獨逸官民は本國政府の方針に従ひ、主として經濟的發展を目的とした。露國を支持し政治的に於て日本を敵とするが如きは斷然之を避く可しと主張する一派もあつた、之に反し日露紛争を機會に支那を壓迫して山東省に對する獨逸の勢力を扶殖す可しと主張する一派もあつた、然るに當時獨逸政府の首相ホーエンロホエは三國干渉以來日獨關係の面白からざるに鑑み、勉めて親日態度を採ること

とに決し居たのであつた、左れば日露の外交戰激烈なる北京に於ても成る丈け其渦中に投ぜざる様獨逸公使に訓電した位であつた、獨逸の對日態度の好轉は青島在留日本人に對する獨逸官憲の態度に於ても顯著なる變化を見るに至つた、則ち横川の視察せる際日本人の青島在住者は漸やく八百餘に上れるが一般邦人は頗る獨逸の施設と待遇とに満足の意を表しつゝあつた、横川は親しく在留邦人有志と會見して夫れとなく獨逸の對日態度を探ぐり又は彼等の意見を聞いて參考に資した、彼は獨逸人間の意向をも探訪して東洋に於ける獨露の關係を研究したのであつた。

長江上下一帶から山東の一角を踏査して北京に歸れる横川は、其視察の報告を内田公使に提出したるが彼は文章報告よりも口頭報告を以て詳細に自家の所見を述べた、彼の視察旅行は所謂御役人の形式的

旅行にあらざるが故に、却つて徹底的視察を爲し又は幾微に觸れることが出来たのであつた。随つて其報告の如き之を文章報告に見るよりも、寧ろ座談的問答に於て最も眞價を發揮するのであつた。内田公使に於ても横川の口頭報告を喜び共に日本酒を酌みながら且つ談じ且つ乾盃するを例とした位であつた。彼は日本記者團の例會(兎耳會と名け毎月十五日)に出席し牛肉の鋤焼を突つきながら青島滞在中斯な話を聞き込んだから、と言つて話したことがある。

『獨逸は山東巡撫袁世凱を取り込まんが爲め頗る努力した、或は借款を申込みせんとし又は獨逸から軍事顧問を招聘させんことに苦しんだ、然るにドウ言ふ次第か袁世凱は全然獨逸の相談に乗らない、新軍隊組織の爲め軍事顧問として獨逸將校の運動猛烈なりしに拘らず、袁は斷然之を排し日本から青木少佐を呼び寄せた。山東巡撫から

直隸總督に榮轉の際、獨逸は夫れとなく巨額の資金提供を申込み、袁の歡心を買ふことに勉めた、然るに袁は之を拒絶して日本から五十萬金を借入れたのであつた、ドウして袁世凱が獨逸に對し斯くの如く冷淡と爲つたかと聞くに、驚く勿れソレが女の問題からであつた、袁は精力家である朝鮮在勤中朝鮮美人四五名を妾に抱へたるは周知の事實であつた、山東に引込んで濟南花柳界の或る美妓を狎愛しつゝあつた、然るに此の美妓意外にも獨逸士官に根引きされ青島に移植さるゝに至つた、一夜微行して愛妓の許を訪へる袁大人は掌中の珠を奪はれたるを知り非常に激怒した、再三取り戻しの嚴談を試みたるも遂に花の姿を見ることが出来なかつた、爾來袁の恨み長く消えず中國大官の面目獨逸人に踏み付けられたりと爲し、獨逸と言へば忽ち不快の顔色を示し、獨逸人と聞けば直に戀敵を思ひ出

すに至つたといふことである。是れ實に袁世凱が一にも二にも獨逸を嫌ふ所以であるとは、如何にもウソの様な事實談である。僕も斯の珍談を聞くやこれこそ青島土産の隨一と信じ、特に今日の兎耳會に御披露したる次第である。戀は思案の外とは善くも言つたものだ。一世の英傑袁世凱亦斯の點に於ては平凡なる一壯年男子に過ぎないワイ』

横川省三の大陸旅行は四川及長江沿岸に止らず、或は滿洲各地に或は保定其他に試みられたのであつた、而も北京に於ける彼は絶えず在留邦人間に奔走して官民一致邦人融和に努力した彼は亦蒙古内地を旅行するに決し支那人従僕一名と共に張家口を振り出しに多倫諾爾方面に向つた、此の旅行たるや、實に張家口より喀喇沁地方を経て北方海拉爾に到る蒙古縦斷の一大旅行であつた、我陸軍武官某の外實に邦人

未踏の地方にして、而も旅行の困難なる想像以上であつた、彼は快然旅途に上り恰も近隣へ遊ぶが如き輕装を以て、雲山千里の蒙古へ向つた、彼は張家口出發後六日間の旅行を経て喀喇沁王府所在地に着し、同王府内に數日滞在したるが、後日彼は喀喇沁王に就て左の如く語つたのである。

『喀喇沁親王は蒙古王公中の權勢家で且つ唯一の親日家である、外蒙古の那圖彥親王と内蒙古の喀喇沁親王は、特別待遇の蒙古親王で那王は外蒙八旗を支配し、喀王は内蒙八旗を支配して居る、蒙古人は一般に溫和なる民族で而も日本人に對して頗る親切である、喀喇沁王は四十三歳の壯年で同王妃は四十六歳の年長にして肅親王の妹君に當れる活潑な婦人である、王妃の家庭教師として王府内に居住せる河原操子女史(後年正金銀行重役一宮鈴太郎夫人)は頗る信頼せ

られ且つ愉快に暮らして居る、親王は蒙古新軍組織の爲め日本士官數名を招聘したい希望を以て我輩に囑して之が實現を期せんとする決心である、喀喇沁地方は農業地としても相當有望であるが現在は主として牧畜に従事して居る、我輩は張家口以來頗る愉快に旅行し、蒙古旅行の意外に容易なることを知つた、或は喀喇沁より赤峯小庫倫間の旅行は極めて困難なるかも知れない、交通不便なるも高山峻嶺なく大河谿水を見ざるが故に、騎馬旅行の如き却つて愉快であつた、若し鐵道布設を見るに於ては蒙古の開發は必ずや幾多有望の事業及産物を現出せしむるであらうと思ふ、

斯くて喀喇沁地方を出發して北へ北へと進んだる横川一行は十數日を経て小庫倫に到着した、小庫倫は蒙古有數の部落地で幾多の喇嘛寺院や數百のテントなどありて、頗る繁華の光景を示しつゝあつた、露國商店の開設あり露人十數名の在住せるありて、盛んに毛皮類の買込みを爲し蒙古人間に於ける信用も頗る厚きものゝ如くであつた、横川は意外なる露西亞人の蒙古發展に驚いた、彼は斯る不自由不便の地方に於てさへ露人の發展を見るが故に比較的便利にして而も氣候順適なる滿洲に於ける露人發展の偶然ならざることを感じたのであつた、彼は日本人に比すれば露西亞人の剛健なる活動力に富めることを知り胸中窃かに露國東漸力の強大なるを恐るゝに至つた、滿洲問題に關する日露談判の容易ならざるを考へつゝ、小庫倫を出發して海拉爾方面に旅行を繼續したのであつた。

試みに支那地圖を披らいて諦視せよ、北京より北滿海拉爾に到る蒙古一帯の如何に廣大なる地域なるかを窺ふことが出来る、一ト口に蒙古縦斷旅行と言ふも、其旅行の如何に大旅行なるかを知らなければな

らぬ大陸旅行中に於て最も困難なる旅行は、實に人跡不毛の蒙古旅行なることを想察せなければならぬ、然るに横川一行は斯る困難なる一大旅行を終へて無事海拉爾に到着したのであつた、實に之れ彼の剛健不撓の精神と壯健無比の體軀とに因らざるを得ない、更に彼が日露間の滿洲談判を憂ふる國家的奉公心と、内田公使に對する義務的熱誠とは彼をして笑つて困難なる大旅行を遂げしむるに至つたのであつた、而も千辛萬苦漸くにして目的地に達するや、忽ち危難の淵に陥らざるを得なかつた。

第一回の哈爾賓入獄

海拉爾(ハイラル)は北滿地方の重要な一都會である、北滿地方なるも元來蒙古車臣汗に屬する三旗部の主要地であつた、露西亞の歐亞横貫大鐵道を布設するや、西伯利亞境界滿洲里よりポグラリーチナヤに到る北滿地方貫通の東清鐵道線を獲得して、其連絡を全うしたのであつた、則ち滿洲里より海拉爾及び齊々哈爾を経て哈爾賓に到り、更にポグラリーチナヤに達して露領西伯利亞に入るのであるが、實に之れ露國の北滿侵略なりと言はざるを得ない、既に東清鐵道布設に依りて北滿侵略の地歩を占めたる以上、露國が義和團事變に乗じ南方滿洲に大兵を出動し永久占領の態度を示せるが如き當然豫想し得可き成行きであつた、而して露國の策源地とも言ふ可き哈爾賓の情況を知ることは最も必要なる事柄で、同時に海拉爾、齊々哈爾各地の情態を知るとも亦必要であつた、是れ横川一行が蒙古縦斷旅行の到着地を海拉爾に定めたる所以であつたと思ふ。

北京出發以來約一ヶ月半の旅程を以て漸く海拉爾に到着したる横

川一行は、其疲れたる身體を旅舎の一室に横へた。彼は海拉爾に數日滯留して休養し、然る後ち東清鐵道の客と爲りて齊々哈爾及び哈爾賓に赴くことに決したのであつた。旅窓の下に久し振りにて寛ろげる彼は高粱酒に陶然たる微酔を買ひ食事を終りて將に就寢せんとした。然るに意外にも旅宿の主人と共に露國憲兵數名は、彼の室内に入り來つた。彼等は一應護照支那官憲發給の旅行券を調べたる上、横川のみを對して憲兵隊本部へ同行を強要した。茲に於て問答無益と悟れる彼は傲然悠悠として警官一行に圍まれながら海拉爾停車場附近の露國憲兵隊に赴いたのであつた。憲兵隊長の尋問に對して横川の答辯は如何にも明快であつた。

『我輩は北京在住の日本商人である。蒙古内地に於ける毛皮の調査及び取引關係の爲め公然護照の下附を受けて旅行し來つたに過ぎない。滿洲は支那の領土である。支那領土内に於ける日本人は治外法權を有するが故に、支那官憲は勿論露國官憲と雖も我輩を拘禁するることが出來ないと思ふ。露國官憲は何が故に無法にも我輩を拘引せるぞ、乞ふ直に放釋せよ。』

『イヤ定めて御不審であらうが、東清鐵道附屬地は露國官憲の支配する處で御座る。隨つて當附屬地へ出入する外人は支那官憲發給の護照と共に其在留地に於ける露國領事の查證を必要とする次第である。貴下は確かに日本の毛皮商人に相違あるまい。單なる旅客に過ぎないことは本官も承認する處である。然れども如何せん本官は露西亞の命令法規を遵守せざるを得ない。貴下は護照のみ所持して露國領事の查證が無い、是れ或は貴下の失念であらうと思ふが、法の命ずる處一應貴下を拘引したる所以である。』

露國憲兵隊長の説明亦一理あることなれば、一時反抗せんとしたる横川も莞爾として之を首肯し、遂に一室に拘留せらるゝに至つた。當時露西亞は日本に對して内々非常の警戒を拂らひつゝあつた。日本人と言へば直に軍事探偵ならんと疑ふが如き所謂疑心暗鬼の神經過敏状態であつた。自家の抱ける不正なる野望を顧みず徒らに日本人を疑ふが如き、實に露國の露國たる所以であつた。

斯くて横川は海拉爾より哈爾濱に護送せられたるが、其護送の汽車中に於て彼は露國軍人の腐敗状態を知ることが出来た。後日彼は當時の護送状態を語つて曰く。

『海拉爾から哈爾濱への護送と言へば如何にも罪人らしく想像せられんが、實際は普通旅客と何等の相違を見ない位であつた。手錠は勿論腰繩もなく、護送の露國士官一名兵士三名は、單に同一客車内に

乗合客の様子を爲せる位であつた。士官は四十歳位の大尉で頗る快活な軍人であつた。彼は僕に向つて「君の財産はドノ位るか」と尋ねたから「左様だな十五萬位だよ」と答へた。彼は「今度の旅行には定めて入費が多かつたならん」と問ふので僕は「五千元を使つた」と答へた。彼は更に「ニヤ／＼しながら君は現にイクラ位の金錢を懐中し居れりや」と聞くから僕は「ハア此の男金が慾しいナ」と悟つた。ソコで露國紙幣二十五留二枚をソツと手渡しすると彼は微笑して紙幣を檢めて聊か驚いた様子をした。五十留の紙幣は彼れに取り意外の臨時収入で而も意外の巨額であつたらしい。僕は羨し相に眺め居れる兵士等にも五留紙幣一枚宛を與へたので、彼等は「難有う」と笑ひながら舉手の禮をしたのであつた。護送主任の士官は笑ひながら言つた。「オイ哈爾濱で遊べるぞ」。兵士の一人は僕に私語して「士官達は

軍隊用品を賣り飛ばして酒色を買ふことが出来る。私共兵士は毎月十留の俸給で漸く煙草を買ふ位に過ぎない、御蔭で一晩の遊び費が出来て楽しい護送の任務です」と白状した、僕に對する彼等の取扱は殆んど上官に對するが如く、頗る懇篤と爲つた。僕は心中大に驚かざるを得なかつた。露國軍隊内部の腐敗は意外に甚だしいものがある、軍人等の風紀紊亂は殆んど支那軍隊に劣らないものがある、斯んな軍隊や軍人を有する露西亞は表面如何にも強大なるが如きも、一朝戦つて見れば案外弱いかも知れないと言ふ信念を抱くに至つた。ハ爾賓に於ける横川は何等の取調べも受けずして八日間牢獄生活を爲した、牢内生活は頗る閑散であつた、彼は旅館(比較的上等の)に在るが如き心地を以て牢内に起臥しつゝあつた、露國官憲の取扱ひも殆んど罪人扱ひを示さず、唯だ逃亡を用心せる迄に過ぎなかつた。一時或は軍事探偵ならんと疑へる露國官憲も數日間に於ける横川の行動や其他に徴し、單なる旅行商人なることに認定したらしい模様であつた。入牢後九日目の早朝、當番兵士に伴はれて或る士官の前に立てる横川は、其士官を見て驚いた、士官は前日彼を海拉爾から護送し來れる大尉某であつた。

『日本人横川省三、其の旅行券に北京在勤露國領事の査證を有せざるは露國法令に違反し禁錮三ヶ月若くは罰金一千留に處す可き筈である、然しながら省三は其法令を知らず且つ海拉爾附屬地以外に止宿したるを以て特に無罪放免す』

右の宣告に依り間もなく自由の身と爲れる横川は入牢の際露國官憲の手に其寫眞を撮られたのである。此の寫眞こそ後年日露戰爭中特別任務に奮進し齊々ハ爾附近に於て露國コサツク騎兵に捕へられ、更に

哈爾賓に送られ軍法會議に附せられたる際、判士長より再三其姓名を問はれたるも彼は容易に明答せなかつた、而も汝は横川省三ならずやと圖星を指されてギョツとした、更に此の寫眞を見よとて差し附けられたるは、實に哈爾賓第一回入獄の時に撮られたる彼れの寫眞であつた、流石の彼も遂に其本人たることを告白して微笑せざるを得なかつたといふ逸聞もあつた。

横川を護送し且つ放免の宣告を與へたる露國大尉は、露國憲兵隊哈爾賓本部の副官であつた、彼は横川の海拉爾驛に於て拘引せられたる爲め、特に哈爾賓本部から出張を命ぜられ更に護送の任に當つたのであつた、彼は横川に對し特別取扱ひを爲し且つ其斷案に就ても有利なる主張を試みて無罪放免の身たらしむるに至つた、而も横川と彼とは其後再三哈爾賓の日本旗亭に會合して特殊の親交を結んだのであつ

た、横川が滿洲駐在の露軍に關する幾多の智識を得たるは彼れ露國大尉の供給したる處であつたかも知れない、一説には彼れ露國大尉某は滿洲在勤から天津駐屯軍副官に轉任し絶へず横川と往來したるやの形跡があつたと言はれて居る、事實如何は横川も此の件に關して全然沈黙を守る爲め、殆んど之を確かむることが出来ない。

横川の哈爾賓入獄は彼に取りて不慮の危難であつた、而も此の危難に遭遇したる彼は寧ろ禍を轉じて福と爲すの臨機應變的行動を取つた、之が爲め種々の參考資料を獲たるは勿論露國軍人間に於ける或る隱微的關係に觸れて、秘々密々なる情報を知ることが出來た、彼が哈爾賓牢獄に這入れる時、同地在留日本人は約八百名内外であつた、哈爾賓在留邦人の事業中最も繁昌したるは實に寫眞屋と女郎屋とであつた、露國人は一般に寫眞撮影を喜ぶ性情を有し居れるが特に軍人に至つ

ては最も寫眞を喜んで居る、随つて日本人經營の寫眞屋は露國軍人を第一の顧客と爲す位ひである、當時日本寫眞屋の番頭に變装せる我陸軍將校があつた、其名は石光眞清、熊本出身の温厚篤實而も剛毅の一人、物、石光少佐(日露戰爭中は出征軍隊管理部長戰後中佐を以て豫備役に入る)は大尉時代に於て露領浦鹽斯德に在留して露語を學び露國研究に熱心した、既にして參謀本部の諜報武官と爲り北滿哈爾賓の邦人寫眞屋の番頭として其職務に全力を傾注しつゝあつた、石光少佐は一見平凡なる小商人風を装へる爲め、露國官民は勿論、在留邦人と雖も其本體を知らなかつたのである、露國の南滿占領後に於ける哈爾賓は實に策源地として大規模の市街建設を見るに至つた、旅順に設置されたる極東總督府と哈爾賓に於ける極東軍司令部とは絶へず連絡して滿洲侵略の魔手を動かしつゝあつた。

哈爾賓の寫眞屋に潜める石光少佐は幾多の苦心を重ねて樞要なる情報を蒐め、自ら支那苦力と鐵道貨車に同乗して大連に微行し、是等の情報を我陸軍當局に通達しつゝあつた、而も露國軍人にして自國軍隊内の機密を漏らし之を石光少佐に内通せるものもあつたといふ位いであつた、其の外我將校にして或は長春其他に變装潜伏したるもの少からざりしは、想像し得可き次第であつた、横川省三は哈爾賓に於て牢獄生活の苦勞を迎へたるも、之が爲め種々有益なる情報と資料とを獲ることゝ爲つた、彼は寫眞屋の番頭たる石光少佐とも密會して共に俱に國家の爲め一身を捧げんことを誓つた、彼は我陸軍武官の「虎穴」に入つて虎子を獲んとする「決死的態度」に感激し、自ら敢て之に劣らざらんことを期するに至つた、斯くて蒙古縦斷の大旅行を終へ更に海拉爾の危難、哈爾賓の入獄などを迎へたる横川は、約三ヶ月の時日を経て北京

の根據地に歸着した、内田公使は深く其勞を謝したるは勿論、其報告に依り幾多有益なる參考資料を得たのであつた、然るに流石強健なる横川も哈爾濱より北京に歸りて間もなく、遂に病臥の身と爲つた、彼の病臥は特に病氣と言はんよりは寧ろ疲勞の結果であつた、公使館附一等軍醫牧田太は豪快なる一人傑であつた、牧田軍醫は爾來昇進して軍醫總監と爲つた、彼は横川の病臥を聞くや直に往いて診察し、呵々大笑し横川の肩を叩いて曰く、

『病名は春瓶病(一名ハルビン病)之を註釋すれば春は張る也、精を張りて力を出す也、瓶はウヲツカ瓶也、強烈なるアルコホールを過飲せる也、處方は禁足十日間、毎日牛乳一升の外ビール其他を嚴禁す』、蓋し横川病臥の急所を衝ける診察であつた、而も牧田軍醫は毎日其病床を訪ひ自ら携へ來れるビールを抜き獨酌獨飲、放言快談、横川をして

羨望展轉せしめつゝあつた、禁足十日の効能忽ち顯はれ牛乳一斗の滋養全身の活氣を回復せしめ、横川の快活なる聲容は再び北京社交界を賑はすことゝ爲つた。

斯くて北京外交界の情勢は日一日險惡と爲り、日露間の交渉いよいよ切迫するに至つた、滿洲に於ける露國の撤兵問題は最初北京政府と露國の交渉なりしも、今や日本と露國の談判と爲り、支那側は寧ろ第三者の態度を探れるやの傾向と爲つた、露國は支那の抗議に對しては寛猛其宜を制し、或は政府當局を懷柔せんとし、或は宮廷内に運動して妥協を試みんとしたのであつた、然るに日本は支那を支持して間接に露國に對抗する態度を一變して、直接露國に向つて其撤兵を要求することゝ爲つた、而も日本の態度は案外強硬にして開戦をも辭せざるの決心を示した、茲に於て露國公使レツサルは一面言を左右に托して日本

の要求をあしらひながら、他の一面北京政府と秘密交渉を開らさ露支間に撤兵密約を締結せんことに決したのである。露國本國政府はレツサル公使の意見を採用した。露支秘密撤兵協約に就て全力を擧げて其成立を期す可き旨を訓電した。北京當局は勿論宮廷内に運動して之が成立を計り、以て日本を背負ひ投げに投げ出さんことを欲したのであつた。

露國公使レツサル以下非常の熱心を以て秘密協約の交渉に努力した。露清銀行北京支店の金庫は巨額の運動費を支出した。宮廷内の親露派は之に策應して秘密協約の成立を促した。慶親王とレツサル公使は極秘裡に會見して滿洲撤兵の新協約を談判した。事は意外に進行して既に兩國全權の假調印を終り將に西太后の御批准を仰がんとする場合に迫つた。

我内田公使は斯る危機の迫れるを知らなかつた。公使館附武官其他に於ても危機間一髪に迫れるを悟らなかつたのである。

露支密約打破の大活動

露國は日本の鋭鋒を挫かんが爲め、露支密約の成立に熱心した。日露間に於て滿洲撤兵問題を交渉することを避け直接支那との間に協定せんことを欲した。而も露國は滿洲放棄を欲せざるや勿論であつた。一時支那側と妥協して日露開戦の危機を緩和すると共に滿洲及朝鮮國境に於ける諸般の施設を完成せんとする企畫を抱けるのであつた。則ち露支の密約は支那側に對する露國の大讓歩を意味し、支那側の要求通り滿洲撤兵を行ふことを約束する文書である。支那側は此の密約を信じて頗る満足し亦日本の後援を要せざるならんが、而も露國は自家

の都合に因り何時にても此の密約を破毀するを憚らざるや察す可しである、露國は日本の挑戦を恐るゝにあらず、唯だ露國の準備未だ整はざるに當り、開戦することを恐れたのである、出来る丈け日本の挑戦を避け旅順其他各地の武装完成し歐露本國よりの軍隊豫定の如く北部滿洲に集中したる場合、嚴然起つて應戦せんとする大企畫を抱けるのであつた、則ち露國は日露戦争を豫期し居れるも其開戦の時機は自家の都合に由り之を決せんと欲し、日本は露國の準備未だ整はざるに乘じ猛然一大打撃を與へんことを期したのであつた。

若し露支の撤兵密約にして西太后の御批准を得るに至らんか、露支間の協約成立と共に日本は全然露支以外に排斥せられ亦滿洲撤兵問題を云爲する能はざるの立場に陥らざるを得ないのであつた、則ち露國に對し強硬なる態度を以て其撤兵を迫り彼れ若し容易に之に應ぜ

ざる場合は、斷然砲火の間に相見へんことを決心したる日本も、其中心問題を失ふて勢ひ立往生の苦境に陥るのみならず、國家存亡に關する戦争開始の好機會を失はざるを得なかつたのである、眞に危機眼前に迫れる外交状態であつた、然るに我内田公使其他に於てもマサカ斯る密約談判の進行中なりとは、夢にだも知らなかつたのである。

或る日島川毅三郎は露西亞公使館に通譯官ゼリコフと會見したるが歸途、横川省三を其寓所に訪ふた、島川は頻りに考へ込めるが、

『ドウも變だ、露西亞公使館の形勢を窺ふにドウも可笑しい位ひ靜かであつた、ゼリコフ奴まで頗る閑散の様子だ、何んだか油斷の出來ない事件が有るかも知れない』、

と横川の氣を引く様に話し掛けた、

『ウム僕も何んだか、變に思ふことがある、近頃李家鏊の奴を訪ふたら

不在であつた門番から聞けば何んでも頗る多忙の様子だ、李は君の友人で露語の通譯官じゃないかコリヤ若しかすると露國と支那との間に何等かの交渉でも始つたのではないか』

横川は斯く話しながら、島川と同道して直に内田公使を訪問した。

内田公使は兩人の意見を聞いて、内心頗る驚いた様子をしたが例の豪傑笑ひを笑つて兎に角、一刻も早く各方面に活動すると共に公使館の別荘棠蔭精舎、勝手口外交の談笑所に某々支那人四五名を招宴することに相談した、其の夜棠蔭精舎に於ける日本流の宴會は頗る盛大であつた、集れる支那人側は外務右侍郎唐某同左丞蔡紹基翻譯局長陶大均主事陸某及通譯官李家鏊等の面々で、主人側は鄭永邦島川横川及中畑書記生等であつた、無論日本藝妓七八名と女中三四名の参加するありて、無禮講の大騒ぎを演じたのであつた、棠蔭精舎は平岡浩太郎の設計に成れる日本庭園を有し日本座敷五六間には夫れ／＼床や違ひ棚などありて、頗る立派な日本座敷である、内田公使は正式の公使館員以外に非公式の島川横川等を囑託と爲せると同様に、堂々たる公使館以外に非公式の棠蔭精舎を設置して私的外交の談笑所に充てつゝあつたのである。

斯くて露國公使レッサルと慶親王との間に滿洲撤兵に關する秘密協約談判の進行中なることは何處からともなく漏洩するに至つた、或は内田公使自ら榮祿の葬式に於て或る大官から密告を受けたりとの一説もあつた、或は李某より島川横川の兩人に耳語して密約成立の迫れることを告げたりとの噂さもあつた、孰れにしても露支密約問題はいよいよ我が公使館に探知せられたのであつた、露國レッサル公使と慶親王との談判は意外に進行して將に西太后の御批准を待つ丈けの

段取りと爲り居れることも判明したのであつた。而も露支談判が極秘裡に進行し殆んど外間に漏れなかつたのは、露國側の魔手深く支那側に延び居れる結果であつた。此の魔手の與へたる誘惑は一大黄金彈を以て打ち掃ふにあらずんば、容易に消散せざるや察す可しであつた。内田公使は斯る事態を知りて頗る狼狽した、勿論表面冷靜を装ひ豪傑笑ひを以て直に諸般の指揮を爲したるも、其胸中の驚きは一ト方ならざるものがあつた。全然味方なりと想へる那桐さへも今回の露支密約交渉に就ては、何等の内報を與へなかつた。絶へず慶王邸に出入して何事が發生すれば直に情報を送りつゝある陶大均も、今回の事件に關しては、一片の通知を爲さなかつた。時々宮廷に出入し西太后の左右に侍し居れる李劉等の面々に於ても、今回の事態を知らざりしものゝ如く、我が島川横川等に何等の注意を促さなかつたのである。實に近來の

一大怪事と言はざるを得ないのであつた。左れば我公使以下の緊張振りは異常なものであつた。寸刻を争ふの危機を脱せんが爲め、直に四方八面に對して活潑なる運動が開始せらるゝに至つた。正金銀行副支配人武内金平と我公使の間に何事かの秘密相談が遂げられた。島川横川等の面々は特に直接運動に當ることゝ爲り、殆んど不眠不休の努力を以て支那側内面に突撃したのであつた。宮廷内に對しても非常運動を以て急所々々を衝くことゝ爲つた。交民巷に於ける我公使館は平素夜間の執務を爲さざりしも、重大なる時局を迎へたる爲め、殆んど徹夜の光景を呈した位ひであつた。露支秘密協約の打破は言ふまでもなく先づ何よりも西太后の御批准を喰ひ止めなければならなかつた。御批准を喰ひ止めんと欲せば、先づ慶親王をして今少し談判未熟の旨を奏上せしめなければならぬ。慶

親王を動かさんとせば、言ふまでもなく其世子振貝子を動かさねばならぬ、振貝子を動かし更に慶王爺を動かさんとせば、例の通り一大黄金彈を投げ出すの外、効果を見ないや勿論であつた、茲に於て慶王父子に向つて特殊の運動と爲り、思ひ切つての大散財と爲つた、言ふまでもなく最も秘密に而も巧妙なる手段を以て數十萬元の袖の下が贈進せられたのであつた、或は五十萬との風説もあり又は慶王に三十萬振貝子に十萬との贈さもあつた、兎に角日本公使館開設以來未曾有の巨額なる機密費が投げ出されたることは想察せざるを得なかつた、而して何人の手に依りて慶王邸内に持ち込まれたるかは不明なるも、其仲間に横川の加はり居れることは疑ひもなき事實であつた、慶王父子を捉ふると共に北京官界の有力家數名に對しても、或は五萬元或は三萬元又は一萬元の進物を爲して其歡心を買はざるを得なかつた、則ち外務尙

書那桐の如きは五萬元の小切手を受取れる形跡があつた、機務に參畫せる陶大均の如きも亦五千元を受け、其他振貝子の第三夫人に於ても

萬金に値ひせる進物を受けたるや想察す可しであつた。

島川毅三郎は主として那桐其他の連中に對する直接運動に努力したるが或る日の夕刻、某新聞記者を訪ふた。

『ヤレ／＼骨が折れた、然し先づは危機一髪を喰ひ止むることが出来た、今後の事は一に親分(内田公使のこと)の手腕如何に在りだ、僕等の仕事は一ト先づ成功した、が然し今更ながら那桐等の慾張りには聊か驚かざるを得なかつた』、

島川と某記者とは牛肉スキ焼に日本酒といふ夕食を共にして主客陶然たる時、横川省三は例のダブ／＼服にロシヤ式長靴で這入つて來た、彼は巨口を開らいて曰く、

『李の奴にも驚いた、王爺に贈つた金額の一割をよこせと強請した、一割と言へば三萬元の金額に上る位ひだ、僕はヤツト説き伏せて一萬元の小切手を手交して彼の居伸努力を感謝したのである、オイ鳥川陶大均に對しても贈呈したであらうな』

『ウム確かに手渡した、陶は頗る恬淡な人物で僕が欽差(公使のこと)からの御禮ぢやと言つて一萬元を渡したら、陶はソンなに澤山は入らない、半金の五千元でよろしいと半金丈けを受取つた、更に彼の注意に依り半金の五千元を陳太々(外務右侍郎唐某の夫人)に贈ることにした』

三人は先づ祝盃を擧げた、首尾好く急所々々を衝いて其の弱點を押へたのであつた、鳥川横川等の外、公使館員某々等も亦各々其の引受けたる方面に陰密の活動を試みたるや勿論であつた、公使館以外の某々二三の有力なる邦人に於ても特に暗中飛躍を試みて支那側と露國との離間に努力したのであつた、實に當時に於ける勝手口外交や、搦手攻めや、黄金彈の放射や小切手の投げ出しなどは、北京に於て殆んど空前の珍事であつたと思ふ、而も斯る必死の活動は、遂に首尾好く危機を緩和し露支密約の成立を妨害することを得て日本帝國の幸運を招來したのであつた。

露國公使レッサルは事殆んど思ふ通りに進行したるを以て、最早や西太后の御批准ありしこと、想察し或る日慶親王を訪ふて夫れとなく探りを入れて見た、然るに怪む可し慶王の言葉頗る不得要領であつた、レッサル公使は短刀直入問ふて曰く、

『王爺よ、過般既に協定せる露支撤兵協約は貴國陛下の御批准を得られたること、拜察致すのであるが、果して如何』

『西太后陛下數日來御不例に渡らるゝ爲め未だ御手許へ協約公文を差出さないのである。随つて御批准の如き其の日時を確答することが出来ない』、

太后陛下の御不例と言へば強いてと言ふワケに往かない、レツサル公使は成る丈け早く御批准の手續を採られんことを依頼し、頗る不氣嫌の體にて退出した、然るに其後數日を経るも慶王より何等の通告なきを以て、レツサル公使は譯官ゼリコフを使ひとして御批准如何を問合はせた、ゼリコフ譯官の慶邸訪問は王爺不在の口實を以てスゲなくも拒絶せられたのであつた、茲に於て流石の露國公使も少しく危疑の念を起さざるを得なかつた、マサカと思ひながらも或は何等かの妨害運動起りしにあらずやと疑はざるを得なかつた、公使は公文を以て慶親王に正式の會見を申込んだ、慶王からは間もなく承諾の旨回答あり、其

會見の時日及場所などの通知もあつた、露公使は此の回答に接して少からず安心して愈々慶王と會見したのであつた。

然るに慶親王はレツサル公使と一ト通りの挨拶を終るや直に述べて曰く、

『閣下、私は過般來閣下と交渉を重ねたる滿洲撤兵協約案に就て、遺憾ながら更に二三の修正を致したいのである。是れ私の個人的意見にあらずして實に兩陛下の御命令に依れる次第である』、

露公使レツサルは意外の提議に顔色を變じて嚴然答へて曰く、

『王爺、滿洲撤兵協約案は既に兩國全權即ち王爺と小官との間に交渉成立したのである、唯だ兩國主權者の批准交換を爲すまでに過ぎない、今更ら修正などゝは以ての外である、苟も國交を重んじ國際信義を念とする以上、貴國に於ては直に批准交換を行はれ以て露支兩國

の和親と東洋平和に資せられんことを望む』、『レツサル閣下、閣下にして若し協約案二三の修正に應ぜざる決心ならば、本爵は到底閣下の希望に應じて御批准を仰ぐことが出来ないのである』、

「王爺、露國は露國の譲れる際りの譲歩を爲したるは、王爺の知らるゝ處である、殆んど露國の體面を損ぜんとする程度まで譲歩したのである、王爺の提案を容れ王爺の修正意見を承諾して交渉の成立を見たのである、然るに尙を此の上二三の修正を提議せらるゝが如き、露國としては到底應諾することが出来ない、重大なる責任は貴國に於て負擔せなければなりません』、

斯くて折角成立したる露支密約は冷淡なる慶親王の變節と熱心な露公使の昂奮に因り、遂に破毀せらるゝに至つた、日本を背負ひ投げ

に投げ飛ばさんとしたる露國は支那の爲め物の美事に突き飛ばされた、否な將に投げ出されんとしたる日本は土俵際に於て金剛力を出し危ふく倒れんとして而も遂に露國を捻り倒したのであつた。

レツサル公使は歸館するや卒倒せる位ひの昂奮状態に陥つた、然るに慶邸よりの内報に接したる日本公使館は内田公使以下ホツと一息吐くと共に、直に日本酒の乾盃を爲して祝意を表した、島川は飛び上つて喜び、横川は躍り出して嬉しがれりとは、左もこそと推察せざるを得ないのであつた。

支那の態度と日露開戦

日露戦争は日本に取り實に國家存亡の一大事件であつた、露國に取りても亦容易ならざる一大事件なりしは勿論であつた、當時露西亞は

世界の大強國を以て自負し而も東洋海面に進出せんが爲め非常の鼻息にて滿洲及朝鮮を侵略せんとした、極東總督アレキシーフは眼中支那なく日本なきの態度を以て滿洲及朝鮮に對する諸般の施設を進むるに至つた、然れども露國は旅順其他の武装完成し亦歐露本國よりの軍隊豫定の集中を見るまで、成る丈け日本との衝突を避けんとする方針であつた、之が爲め露國陸軍大臣クロバトキンは親しく日本を訪問して何等かの妥協を提唱したる形跡があつた、露國の北京公使レツサルは露支撤兵協約を秘密に交渉して日本の鋭鋒を挫かんことを企畫したのであつた、若し露國の胸算成功して其望む處の時機に於て日露の開戦を見るに至らんか、日本の不利は言はずして明かであつた、而も日本は露國の胸中を透見し居れるが故に彼の準備未だ完からざるに先ち、斷然起つて開戦するの決心を抱くに至つたのである。

露支撤兵密約の不成立は露國をして憤慨せしめたレツサル公使は其背後に日本の隠れたることを知り地團太蹈んで口惜しがつた、而も之れ露清銀行の放出したる黄金彈が、正金銀行の放出したる黄金彈に劣れる結果であつた、露國の裏面外交に對する日本の勝手口外交の勝利を意味せるものであつた、レツサル公使は之が爲め持病の昂進と爲り遂に病臥するに至つた、我内田公使は之が爲め益々意氣揚りて活動を續くるに至つた、然れども重大なる危機は刻々に迫りていよいよ日露兩國の戦争を迎へざるを得ないことゝ爲つた、露西亞は滿洲に於ける重要地點の武装を促進し且つ本國よりの派兵を増加した、西伯利亞鐵道は全能力を傾けて軍隊軍器等の大輸送を開始し、朝鮮國境に於ける經營も亦着々として進行しつゝあつた。

日露開戦の避く可からざるに際し、支那側に於ても其態度を決せざ

るを得ない場合と爲つた、北京朝廷は各省督撫の意見を徴したるが多数の意見は厳正中立を守る可しとするにあつた、然るに廣湖總督張之洞は左の如き意見を奏上して廷議を動かさんとした。

(一) 滿洲は支那の領土なるが故に露國の滿洲占領は支那への敵對行動である。

(一) 日本は露國の滿洲占領に反對するか故に支那の味方なること明白である。

(一) 日露開戦の場合は支那として日本を支持す可きは當然なるも支那の戦争参加は到底不可能であらうと思ふ。

(一) 義に於ても情に於ても支那は日本を支持せなければならぬ、茲に於て日本に對し好意的中立の方針を採ることは最も至當にして世界各國の例に徴するも之を見ることが出来るのである。

(一) 然れども支那としては日露開戦を不幸不利と爲さなければならぬ、出来るなら戦争を阻止して平和の局面を迎へたいと思ふ。

(一) 撤兵協約を露支間の密約とせるが故に日本の反對を招いたのである、余は茲に於て提議する、日本を加へ日露支三國に於て滿洲撤兵問題協定せんことを、

北京朝廷の御前會議に於て張之洞の奏議に關する論議は頗る熱心であつた、而も日本に對する好意的中立論は種々の非難あり容易に採用せられざる情況であつた、日露支三國會議の意見に就ても、慶親王の反對が起つた、慶王の反對は三國會議其のものに反對するにあらずして時機既に遅しと言ふにあつた、慶親王は露支密約の當事者でありながら、其密約を破つたのである、露國は慶王の變節を恨らめるや勿論であつた、慶王亦内心疚しき處あるを以て、今更ら三國會議を提唱すること

を欲せず張之洞の意見に對し最も熱心に反對せざるを得なかつたのである、假りに三國會議開催に賛成し之を露國側に提議するとせんか、レツサル公使は勿論露本國政府と雖も慶王の鐵面皮を怒り斷乎之を拒絶するや察す可しであつた。

北京朝廷は張之洞の意見中三國會議開催の議を否決したるも、日本に對し好意的中立態度の採否如何は更らに研究することゝ爲つた、然るに直隸總督袁世凱は張之洞の意見を支持し特に北京へ入り親しく西太后に謁見した、袁直督は西太后に引見を仰付けられたるが彼は日露開戦の場合に處する對策を奏上し、廣湖總督張之洞の明達なる意見に賛成する旨を述べたのであつた、袁の對策及意見は西太后の嘉尚を得たるものゝ如く、彼は上首尾を以て退出したといふことであつた、斯くて北京朝廷に於てはいよいよ日露開戦の場合には、直督袁世凱をして

中立維持の爲め各地に軍隊を配置せしめ、特に臨機の處置を採らしむることに決定した、則ち直隸提督馬玉崑の軍隊は古北口及熱河方面の守備に當らしめ、滿洲の臨戦地境は袁世凱部下の軍隊をして守備せしむることゝ爲つた。

支那側の態度如何は日露兩國に取り異常の利害關係あるや勿論であつた、單に外交戦に於ても重大なる關係を有し居れるが、一朝開戦するに至らんか、支那の向背は眞に勝敗を決す可き一因たるを知らなければならぬ、左れば露國に於ては支那の同情を得んが爲め、種々の苦肉策を試み若くは宣傳を行ふたのであつた、日本側に於ても亦同じく極力日支兩國の利害同じき旨を高唱し以て、露支の離間に努力したのであつた、當時我が參謀本部より北京公使館附武官青木大佐への内訓には左の意味を含んで居た。

- (一) 支那當局をして日本を支持することは則ち支那の利益なることを知らしむる爲め極力宣傳し若くは接觸を保つこと。
- (一) 支那人間に日本の對露開戦に關する眞意を知らしめ支那人をして日支共同の利害觀念を抱かしむることに全力を注ぐこと。
- (一) 支那官民に對し最も親善關係を進むることに努力し且つ經費を惜まず、支那官民の有力者を懐柔すること、但し支那新聞社及記者に對する懐柔は最も緊要なりとす。
- (一) 支那人にして日本語に通ずるもの、及び日本人にして支那語に通ずるものは、此の際優遇の途を講じ且つ諜報其他の任務に採用することに注意を拂ふこと。
- (一) 支那官民をして日本人と同じく對露敵愾心を起さしむることに努力すること。

斯る最高方針の下に北京在留邦人は各自各方面に向つて活動するに至つた。我公使及武官援助の下に支那人間に日本語を教ふるの學堂設立せられ若くは日本語に通じたる支那人は續々相當の待遇を以て採用せられたのであつた。當時北京に開設されたる日語學校は、東文學堂、文明學堂、振華學堂、日華學堂、大東學堂等を數ふる位ひであつた。其他天津保定は勿論遠く正定府に於ても日語學堂を開設したる邦人志士もあつた。

支那官民をして露國は日支共同の敵なりとの觀念を抱かしむることとは、實に重要な問題であつた。否な單に問題として取扱ふのみならず之を實現せしめざる可からざる樞要なる事態であつた。支那官民を動かさんと欲せば先づ一般の人氣を作り出さなければならぬ。人氣を作らんとせば、何よりも先づ支那新聞紙をして鼓吹せしめなければな

らぬ、支那新聞を左右せんと欲せば、支那記者連と接近し絶へず彼等を懐柔せなければならぬ、茲に於て我内田公使は島川横川小村等をして支那記者仲間に突撃せしむることゝ爲つた。

當時北京及天津に發刊しつゝある支那新聞紙は其の主なるもの七八であつた、勿論中小新聞を數ふれば三十有餘種に上れるも、内外人に信用ありし新聞紙と言へば、北京の北京日報順天時報燕京日日、天津の大公報天津日日順直報等に過ぎないのであつた、就中北京の順天時報は邦人中島及中西等の創設したる日刊漢字新聞であるが、經營頗る困難を極めつゝあつた、之が爲め我公使館に於て同新聞を買収して紙面を擴張し社務を振興し日支共同共存の宣傳機關として大に効果を發揮するに至つた、北京日報は純然たる支那有志等の機關紙にして而も頗る勢力あり信用ある日刊新聞紙であつた、同紙の主筆沈某の如きは

常に我記者團と往來せるが故に、横川との間も頗る親密であつた、横川は早くも沈某を懐柔し且つ北京日報に對し毎月相當の補助金を與ふるの内約を結べる爲め、同紙の論調は殆んど日支同盟を主張せるが如く我邦に有利なる宣傳振りを見たのであつた。

天津の大公報は直督袁世凱の機關紙として多大の勢力を揮ひつゝあつた、而も同紙創立の際、新聞社用の印刷機械活字及原紙等の買入を世話し且つ一時資金を立替へたるは實に邦人某商であつた、此の商人某氏と横川とは頗る懇意の間柄なりし爲め、某氏を通じて大公報主筆陳某に接近し、遂に或る程度の懐柔を遂げたのであつた、勿論袁世凱の機關紙なれば袁の意向如何は同紙の論調を左右しつゝあつた、然るに袁の日露兩國に對する意向は露よりも日に對して好感及利害關係の一致を有し居たるが故に大公報は日本に有利なる宣傳機關となつた、

袁世凱に對する我日本の方針は言ふまでもなく後援支持であつた。天津在勤の總領事伊集院彦吉は其人物手腕決して内田公使に劣らなかつたので當時北京に内田公使在り、天津に伊集院公使在りと呼ばれたる位ひであつた。左れば伊集院總領事と袁世凱との間柄は公私共に頗る親密で互に其人物を敬愛しつゝあつた。袁世凱は日英米を後援として暗々裡に露獨佛に當れる形跡あり、特に日本の援助は袁の勢力發展に資したるが故に、日露戦争に當りては日本に好意を寄せたるや勿論であつた。彼が張之洞の意見を支持し日本に對する好意的中立態度の至當なることを主張したるは、必ずしも張之洞を待つまでもなかつたことと思ふ。

夫れ斯くの如く我官民一致の努力に由り北京天津一般に於ける人氣は、露國よりも日本に好感を示す傾向と爲づた。支那新聞紙の論調も漸次我邦に有利と爲り露國の侵略行動を攻撃するに至つた。勿論露國側に於ても支那官民間に向つて排日氣勢を煽動し若くは支那新聞記者を買収して露國の提燈持ちたらしめたのであつた。外字新聞紙の多くは概して中立的論調を示したるも一二の英字新聞の如きは日本と支那との接近を妨害しつゝあつた。然れども大勢は日本に傾ける爲め日露開戦前の情態は我が最高方針の實現を見たるは勿論、戦争中に於ける我軍の勝利に由り益々一般支那人の人氣は我邦に好感を示したのであつた。外形に表はれたる人氣は我邦に有利なりしとは言へ支那人も日本人も英米人も各々其胸中に於ては日本を危ふまざるはなかつた。不人氣なりと雖も露西亞は世界の大強國である。人氣を呼べるも日本は漸やく東洋の新進國家に過ぎない。其國土から見れば殆んど比較することが出来ない。其兵力から見れば十に對する二三にも足らな

い、其他日露兩國を比較すれば、何人も露國の優勢を信ぜざるを得ないのであつた、況んや由來事大思想に富める支那人が表面日本に傾きながら、内心露國を恐れつゝありしは當然の次第であつた。

露支密約の打破に暗中飛躍を試みたる横川等は更に日露開戦の時局を迎へて、我最高政策の實現に奮闘するに至つた、北京各方面に活動し或は夜間訪問に或は花柳の巷に或は棠蔭精舎に幾多の支那官吏等と應酬して、彼等の親日氣分を旺ならしめたのであつた、明治三十四年十月を以て北京に到れる横川省三は、爾來二ヶ年餘の春秋を送迎した、此の間或は大旅行に上り或は危地を踏み難所を越へ或は非公式外交に努力し若くは邦家重大の危機を脱せんが爲め不眠不休の活躍を以て其の使命を全ふしたるが如き、實に外間の想像する能はざる苦勞を遂行したのであつた、而も自ら持すること極めて恭謙なるが故に、少數知友の外、何人も彼の奉公振りを知らない位ひであつた、一人不知而不愠、彼れ亦君子人と言はざるを得ない。

虎穴に入れる諜報武官

「臥薪嘗膽」十年間の忍苦はいよ／＼露國に對して爆發することゝ爲つた、我國民の緊張振りは勿論我陸海軍人の決死的覺悟や眞に悲壯を極めた、是より先き我軍事當局に於ては、露國の南滿其他へ進出の結果何時かは我邦と衝突す可きを豫想し、最も秘密に要所々々に我諜報武官を駐在しめたのであつた、是等の武官は俊敏剛毅の壯年將校を選拔し、種々の變装にて密派せられたる爲め、露人は勿論我邦人さへも全然之を知らなかつた、明治三十年頃露領浦鹽斯德に於ける本派本願寺布教所に主任布教師として清水松月なる壯年僧侶が赴任した、清水師は

壯年の身に拘らず道心堅固にして且つ説教に巧妙なりし爲め間もなく在留邦人の歸依する處と爲つた、毎週一回の説教日には布教所内に溢るゝ位ひの信徒等を見受け、其評判いよゝ好く、其信仰ますます篤きを示した、浦鹽在留邦人約三千人は斯る立派なる布教師を有することを誇りつゝあつた。

然るに明治三十七年日露戦争の起るや、我滿洲軍の右翼隊なる川村鴨綠軍の最右翼に連繫し鷄冠山長白山一帯より間島に亘りて横行縦破する馬賊の一大集團があつた、彼等は日本軍を支持し露軍の左側背を脅威し又は追撃して勇敢無比に活躍した、露軍之が爲めに狼狽し日軍之が爲め有利の戦局を占むるに至つた、此の馬賊團の首領は「花大人」と呼ばれたる勇將であつた、「花大人」とは實に浦鹽本願寺の布教師清水松月和尚其の本名は花田伸之助少佐であつた、花田少佐は大尉時代

特に川上操六將軍の内命を受け、諜報武官として浦鹽に在動したのであつた、而も變身變名本派本願寺布教師として露人の目を暗らまし幾多重要な軍事諜報に従事し、時に危地に入出しつゝあつた、花田少佐が「花大人」として間島及吉林山地に活動し數百の馬賊を指揮し、露軍の左側背を攪亂したるが如き、實に布教師時代に豫め其地理其他を調査し置ける結果であつた。

明治三十五年頃營口の我領事館に仁平某なる一書記生が居つた、領事瀨川淺之進や領事官補太田喜平は彼の上官なるも、彼の眼中殆んど上官なきものゝ如く、實に豪快なる態度を示しつゝあつた、彼は書記生として時々遼陽海城大石橋復州各地に出張し、又は遠く旅順大連及び奉天長春方面へも出張したのであつた、彼は自ら領事館書記生と名乗り或は滿洲各地邦人の間に入出し、或は露國官憲に接近して商工業其

他の調査を試みるものゝ如き様子を示したのであつた。營口在留邦人は勿論、領事館員と雖も彼を一箇の書記生として待遇し全然怪しまなかつた。況んや各地の我官民及び露國人の如き、彼を書記生として迎接し何等の懸念なく其の自由行動に任せたること當然であつた。

然るにいよいよ、日露の間に砲火相見ゆるや、黒木大將の第一軍は逸早く鴨綠江を突破して露軍を撃退し、一戦亦一戦遂に本谿湖方面の險要に迫つた。露國の勇將ストレンベルグは部下に命じて三百六十高地の要害を嚴守せしめ、以て黒木軍の側面を脅威したのであつた。茲に於て黒木軍に屬せる我近衛師團の一個大隊は三百六十高地占領の目的を以て決死的突撃を敢行した。敵味方の死傷續出し一勝一敗亦一進一退、血河屍山の慘状を見るに至つた。而も我軍の勇猛なる仰いで敵陣に迫り白兵戦を以て遂に要害堅固にして敵の死守せる高地を占領した。

のであつた。斯る血戦に於て自ら先陣に進み指揮刀を振るつて敵を斬り味方を勵ましたる大隊長其人は實に營口領事館の一書記生と呼ばれたる仁平少佐であつた。仁平少佐は三百六十高地占領と共に壯烈なる戦死を遂げたるが大山滿洲軍總司令官は少佐の殊勳中の殊勳を表彰する爲め、特に勅命に由り同高地に仁平山の名稱を附し百代の後ちまで其芳名を遺すことゝ爲つた。仁平少佐は其大尉時代に身を書記生と變じ、親しく滿洲各地の視察調査に従事し、諜報武官としての任務に努力したのであつた。

明治三十六年の初冬頃、滿洲の要地たる遼陽城に怪しげなる一人の支那乞食が現はれた。其容貌を見ればドウ見ても確かに支那人乞食に相違ない。而も其眼光の炯々たる、其行動の剛邁なる、決して尋常一様の乞食にあらざることを推察せざるを得なかつた。彼は城外の乞食小屋

に居住し數名の乞食を願使して絶へず露國軍隊附近を徘徊せしめたのである、彼れ自身も亦危険を冒して露國の砲臺其他防備陣地附近に出没し、何等かの偵察を試みるやの形跡があつた、時として夜陰に乘じ大膽にも砲臺内に忍び込み大砲其他を調査したることもあつた、彼は乞食に似合はぬ大金を所持するものゝ如く、或は手下の支那乞食に或は露國兵士等に巨額の黄金を附與しつゝあつた、露國下士卒等は彼を怪しみながらも其の黄金の魔力に迷ひ、彼を怪しむことが出来なかつた、支那人等は喜んで彼の指圖に従ひ種々の情報を致し又は調査資料の蒐集に奔走したのであつた。

然るにいよゝ、日露開戦と爲り、我が第二軍司令官奥大將の部隊、大連に南山を破り金州得利寺に露軍を撃破して大石橋海城に迫るや、露將クロバトキンは遼陽に總司令部を置き来て我三軍を迎撃せんとし

た、第一軍は本谿湖方面より、第四軍野津大將は橋木城方面より、第二軍は海城方面より、齊しく遼陽目掛けて進撃するに至つた、而も遼陽に於ける露軍の防備状態は頗る秘密なりし爲め、我滿洲軍總司令部に於ては、其實状を知らんことに苦心慘憺中であつた、恰も好し危険の身邊に迫れるを知り風雨の夜陰に乘じ遼陽の虎口を脱出したる彼の怪しげなる支那乞食は、山海關に到りて其本體を現はした、彼れこそ實に我諜報武官の一人たる土井市之進大尉であつた、土井大尉は山海關より遼陽に於ける露軍防備状態其他武装等に就て詳細なる報告を滿洲軍總司令部に急送したのであつた、此の報告こそ眞に我國運に關する重要な軍事報告であつた、滿洲軍總司令部は此の報告に基いて遼陽攻撃の作戰計畫を立て、遂に遼陽を占領したのであつた、若し土井大尉の「虎穴に入りて虎子」を獲たるが如き重要な報告を得ざりしに於ては我

が滿洲軍の遼陽攻撃果して成功せるや否や頗る疑問であつたと思ふ、此の點から考ふるも土井大尉の殊勳や眞に偉大なものであつた、土井大尉の報告書は鉛筆の走り書きなるが現に畏くも我宮城内の振天府に納められ千載の後ちに傳はるの光榮を拜するに至つたのである。

哈爾賓の邦人寫眞屋に於ける一番頭としての石光眞清少佐に就ては既に記述したる通りである、其他江木大尉の如きは海城に潜伏して露軍の情報を探ることに苦心した、或は身を邦人飲食店の出前持ちに變装して露軍内の實況を偵察し、或は邦人洗濯屋の注文取りと爲つて露國人間に入出したこともあつた、是等滿洲各地潜在の我諜報武官と共に移動諜報武官とも言ふ可き幾多の將校連が絶へず去來して連絡を採りつゝあつた、實に開戦前に於ける我が諜報武官の暗中飛躍は、二十五年後の今日之を回顧するも肉躍り魂飛ぶの思ひを爲す位ひである、悲壯とや言はん、沈痛とや言はん、眞に日本男兒の眞骨頂を發揮せるものであつた。

露國に對する我邦上下の態度は殆んど主戰的決心を示した、既に主戰の決心を爲す以上、我陸海軍人は死力を盡くして戰闘に従事し我が國民は全力を擧げて國運の危急に應ず可きや勿論であつた、國內に於て尙且つ然り、況んや北京在留の我官民は眼前に日露外交の重大なる場面を迎へたる爲め、更に緊張し昂奮したのであつた、在留邦人は殆んど一致結束した、勝敗を天に任せて奮闘するの外なき場合に在ることを知つた、軍人以外邦人に於ても義勇奉公の念を燃やし一身を邦家に捧げんことを決心したのであつた。

露西亞側に於ても決して油斷の態度を示さなかつた、歐露の軍隊は續々滿洲に輸送せられ各方面の戰闘準備は着々進行するに至つた、日

本側に於て露國の内情を探ると同時に露國側に於ても日本の内情を探りつゝあつた、日本側に於て支那人又は外人(ポーランド人其他)の密偵を放つてハ爾賓其他露軍の内情や軍事計畫を探れると同じく、露國側に於ても支那人又は日本人(所謂露探なる非國民)の密偵を放てるや察す可しであつた、現に北京天津に出没して日本の内情を探れる露探の一日本人があつた、日本人片岡某と名乗れるも其の實彼は、米國生れの日米混血兒であると言ふことであつた、彼は外人間にキャプテン片岡の名を呼ばれ、自ら米國海軍士官たりしことありと吹聴しつゝあつた、北京天津の邦人間にも彼と交際せるもの少からず、邦人に對しては日米貿易商なりと稱し天津支那街に商店を開設し居れるは事實であつた、然れども彼の行動は間もなく邦人間の疑問と爲つた、彼は北京に於て盛んに花柳界に豪遊し而も金錢を湯水の如く消費しつゝあつた、

特に我公使館員や軍人連や記者等の動靜を探らんとするものゝ如く或は藝妓仲居等を通じて探らんとし又は支那人を使つて探らんとする形跡があつた、片岡某の素性や其資産状態は殆んど不明にして唯だ彼が我官民に接近して何等かの事情を偵知せんとし居れるは疑ふ可からざる次第であつた。

明治三十七年の正月以來、片岡某の北京出入は最も頻繁と爲つた、當時恰も我公使館附武官青木大佐の特別任務計畫に着手せらるゝありて最も機密を要する時節であつた、然るに彼れ片岡某は絶へず志士等の快遊する日本旗亭に遊び、暗に我志士等の言動を偵知したのであつた、天津に於ける彼の舉動も益々奇怪と爲れるを以て、遂に我が軍事官憲の注意人物たることゝ爲つた、彼は北京及天津の邦人寫真店に於て主として特別任務に採用されたりと目せらるゝ志士連の寫真を買ひ

集めたのであつた、其外我要地に在る陸海軍人の寫眞なども多數買ひ込んだる模様であつた、斯くて片岡某の行動はいよゝゝ賣國的人物たることの見込み充分と爲つた、茲に於て天津駐屯軍司令官仙波太郎將軍は部下憲兵隊長に内訓して嚴重なる措置を採らしめた、爾來片岡某の消息は殆んど天津及北京に絶つたのであるが、或は彼れキャプテン片岡は旅順に逃亡したりとの風説もあつた、或る一説には天津市内に於て支那強盜の爲め殺害されたりとの噂さもあつた、又一夜彼の外出を窺へる數名の怪漢あり、彼を捕ふるや天津郊外の墓地に到り豫め掘られたる墓穴に彼を投げ込み石油を注いて焼き殺し其儘埋葬しにりと、の異説もあつた、孰れにしても賣國的人物の最後は如上風説中の一説を事實に近しと爲さざるを得ないのであつた。

露探片岡某の買入れたる寫眞中に志士連の寫眞少からざりしは事

實であつたといふ後日譚もあつた、後日譚に依れば特別任務計畫を探知したる片岡某は出来る丈け其計畫の内容を探り且つ任務採用志士を知らんことを欲した、之が爲め北京寫眞店に於て志士と想はるゝ連中の寫眞を買ひ込んだのであるが、其寫眞中に横川省三沖禎介等の寫眞存在したるは勿論であつた、後日横川沖兩人が哈爾濱の軍法會議に附せられたる際、判士長は二葉の寫眞を示し之れ汝等の寫眞にあらざるや、汝の名は横川、汝の名は沖なりと圖星を指したりとの一説もあつた、則ち惡む可き片岡某は横川沖等の寫眞を露國軍事當局(或は北京露國公使館又は天津露國領事館)に密送し且つ特別任務班の行動に關する一端をも密告したかも知れないのであつた。

然れども是等の風説は單に風説に止まれるやも知れなかつた、或は或る程度の事實を含めるやも知れなかつた、兎に角斯る風説百出した

る丈け夫れ丈け日露開戦前の形勢は兩國共に異常の緊張を示したのであつた、露國に取りては東洋大發展の機會であつた、日本に取りては皇國興廢の一大國難であつた、北京に於て内外危局を迎へたる横川たるもの豈に踊躍國難に赴かざらんや。

青木大佐と特別任務計畫

明治三十六年の十月、北京公使館附武官山根武亮少將は朝鮮鐵道總監に榮轉した、其後任として青木宣純大佐北京に到任したるが大佐は往年北京駐屯軍參謀長で内外各方面に多數の知人を有したのである、支那語に精通せるは勿論英獨語にも通じ且つ外交的武官として推重されつゝあつた、宮崎出身の寛厚にして剛邁なる好武人で、而も志士浪人を愛撫し平民的を喜べる紳士であつた、青木大佐の北京在勤は内田公使以下及在留邦人も大に歡迎し、支那側に於ても好感を以て迎へたのであつた、青木大佐は往年袁世凱の軍事顧問として山東に在留し袁の新軍隊を組織したる人で、直督袁世凱とは切つても切れない關係を有して居る、内田公使と青木大佐とは單に酒飲み仲間としても頗る親密であるが、其相互信頼の友情は公私共に何等の疎隔を見ない位ひであつた、時局重大の際、青木大佐の北京在勤は實に適材適所と言はざるを得なかつた、隨つて大佐の一舉一動は内外の齊しく注目する處であつた。

青木大佐は着任後間もなく或る日、其の補佐官たる阪西少佐佐藤大尉の兩武官を自室に招いて、三人鼎座樞要なる密議を凝らしたのである、當時何人も密議の内容を知らなかつたのであるが、實に是れ特別任務計畫の實施に關する最初の謀議であつた、青木大佐は北京公使館附

武官の任命と共に參謀總長より或る重大の密命を受領した、此の密命を受けたる大佐は自家研究の計畫を上申し大體に於て其採用を得て北京に來任したのであつた、然れども其實行問題其他に就ては北京に於て阪西佐藤兩武官の意見を徵したる上、更に當局の詮議を経なければならなかつた、則ち阪西佐藤兩武官と共に鼎座密議を凝らせる所以であつた、其後引續いて協議を重ね研究を積み、遂に阪西少佐の手に於て特別任務計畫案を作成したるが、是れ實に破天荒の一大計畫なりと言はざるを得なかつた。

青木大佐等の特別任務計畫案は愈々我最高軍事當局の採用する處と爲つた、其計畫の梗概は實に左の通りであつた。

- (一) 出征滿洲軍の行動に資せんが爲め特別任務班を編成す。
- (一) 特別任務班は敵軍の右側背に策動し其軍隊輸送機關を破壊し兵備

線を攪亂し武器彈藥倉庫を爆破し敵軍を牽制し其他敵の行動を妨害するを目的とす。

- (一) 各班は班長一名(現役將校)班員數名及び部下若干(蒙古馬賊及漢人馬賊若くは壯丁より成る)を以て編成す。
- (一) 各班の班員は決死奉公の志士を募集し陸軍通譯(將校相當官)に採用し其の班員數を四十七名と定む。
- (一) 第一班は北滿海拉爾に向ひ同地附近の東清鐵道線路及鐵橋を破壊し更に敵軍兵站線を攪亂することに奮躍す可し。
- (一) 第二班は北滿齊々哈爾を目的地と定め同地附近の東清鐵道及鐵橋を爆破し、更に同停車場及工場兵舎等を焼却せしめ且つ支那人間に排露宣傳を行ひ全力を擧げて敵の後方を擾亂せしむ可し。
- (一) 第三班は北滿哈爾濱に潜入し松花江の大鐵橋爆破に従事し、更に同

市街各所に放火して敵軍の攪亂に奮闘す可し。

(一) 第四班は北滿哈爾賓附近に潜入し敵の火藥庫兵器庫其他を爆破せしめ、更に兵站線の攪亂に努力奮進す可し。

(一) 第五班は四平街長春間の鐵道線路及鐵橋等の破壊を目的とし、更に敵軍の虛を衝き以て其側面を脅威す可し。

(一) 第六班は長春奉天間の鐵道及鐵橋破壊を敢行し且つ敵軍の側面を攪亂せしめ蒙古各地に出沒する敵の兵站部及警戒部隊の掃蕩に奮闘するを目的とす。

(一) 各班長以下孰れも支那服又は蒙古服裝を爲し蒙古方面より各自所定の目的地に潜行し努めて敵の監視線を避く可し。

(一) 各班共に獨立部隊なるが故に獨斷專行を許すも我が軍の特別挺進隊其他と連繫策動して行動するを要す。

特別任務計畫の特色は、實に非戦闘員を以て最も猛烈なる戦闘員たらしむるにありと言はなければならぬ、則ち其幹部たる四十七名の志士等は殆んど非戦闘員で二三豫備將校の外、孰れも軍人以外の國民であつた、然れども是等の志士は其の義勇奉公の精神燃ゆるが如く其の國難に殉ぜんとする決死的勇氣は敢て戦闘員に劣らないのであつた。

日露開戦に際し我軍事當局及政府部内に於ても、其勝敗如何を危疑したるや勿論であつた、彼我の國力、彼我の兵力、彼我の國際的信望等から考ふるも、我れは容易に彼れに勝つ能はざる筈であつた、唯だ戦ふも負け戦はざるも負くるとせば、斷乎戦ふて負くるの決心を以て殊死奮闘す可きのみであつた、軍人は勿論國民皆兵の日本帝國に於ては軍人以外の國民と雖も或は戦場に或は後方勤務に全力を傾注して殉國の精神を發揮せなければならなかつたのである、況んや北京天津在留の

邦人は日夜重大なる危局に當面したるが故に其殉國奉公の精神は殆んど百度以上の熱氣を帯べるに於てをや、青木大佐が特別任務志士の募集を開始するや、北支那在留邦人中の有志等が我れも我れもと其採用を熱心に申入れたること決して偶然ではなかつた。

青木大佐は既に特別任務計畫案の採用を得たるを以ていよく其班員の募集に着手した、勿論事は極秘裡に運ばれ、青木大佐、阪西少佐、佐藤大尉の外、我内田公使外一二名位ひが其計畫着手を承知し居れるのみであつた、北京在留邦人は言ふまでもなく内外共に斯る大膽不敵の大計畫を知らなかつた、左れば志士採用の如きも最も秘密にして先づ其本人の經歷人格等を研究し然る後ち直接面會して採否を決し而も秘密嚴守を誓はしめたのであつた、募集と言ふも所謂募集にあらずして特に見込みを附け置ける邦人中の有志に對し極秘裡に相談を持ち込むといふまでであつた。

特別任務班の班長は現役將校中より特に青木大佐の手に選拔せられたる勇敢剛邁の面々であつた、橋口勇馬少佐は義和團事變後北京安民公所々長として内外に威望を揚げたる人で、而も剛膽不屈薩摩武士の典型であつた、(橋口少佐は其後少將に昇進し不幸にも病死された)伊藤大尉は最も困難なる方面に向へる班長として勇敢決死の活動を爲した、特別任務に殊勳を奏したる後ち旅順口攻圍軍に再征して悲壯なる戦死を遂げた、津久井平吉大尉は保定武備學堂の教習と爲り頗る支那側に敬愛せられたる壯年將校であつた、快活豪放如何にも肌合ひの面白い人で、死に臨み呵々大笑する底の度胸もあつた、特別任務に奮闘中絶へず班員と談笑し亦敵兵近きを知らざるが如き態度を示しつゝあつた、津久井大尉は其後中佐に昇進し自ら豫備役編入を願ひ、現に

南滿洲の復州地方に一大果樹園を經營し「さむらひ」商賣の大成功者たるに至つた。

井戸川辰三大尉は我陸軍部内屈指の支那通であつた、中尉時代に早くも四川に遊び長江一帶の形勢を研究し更に北支那方面に遊んで其の名を在支浪人間に知られつゝあつた、資性鋭敏にして剛毅、胸中縦横の策を藏するも表面平凡なる態度を示すが如き、實に得易からざる一人傑である、青木大佐に兄事し居れるが故に眞先に特別任務班長に選ばれた、班長としての井戸川大尉は死地に入し最も勇敢に活動した、其後中將に昇進し第十三師團長を最後の御奉公として現役を退けるも、尙ほ上原元帥の裨刀として政界其他に活動して居る、篠田大尉は沈毅果斷の好武人であつた、第六班長として最も活躍し部下と共に幾度か死地を出入したのであつた、而も武運強くして無事特別任務を終れ

るが、更に旅順口攻圍軍に参加奮闘し、不運にも敵彈に斃るゝに至つた、實に武士の運命こそ朝夕を測られずと言はざるを得ない。
夫れ斯くの如く特別任務班の各班長は、孰れも現役將校中より選抜したる鐵中の錚々たる面々であつた、然るに獨り第二班長に至つては現役將校にもあらず、亦豫備將校にもあらざる一志士であつた、曰く横川省三即ち其人であつた、實に是れ破天荒の一大計畫に於ける破天荒の特別採用なりと言はざるを得ないのであつた、而も横川は少佐待遇の班長を命ぜられ其班員五名の如きも主として彼の希望に由り選定せられたる位ひであつた。

是より先き青木大佐は日夕横川島川等と往來し且つ共に飲み俱に快談して交友の間柄と爲つた、既にして青木大佐の特別任務計畫實行期に入るや、大佐は心算かに横川の人物に望みを屬し一夜彼と會見し

胸襟を披らいて國事を談じたのであつた。

「ね横川君は永らく内田公使の囑託として國事に奔走努力したから此の上更に國家の御奉公を強ひるワケに往かない。然しながら君も能く御承知の通りイザ一開戦と爲ると容易ならぬ一大國難だよ、トテも軍人丈りでは遣り切れないから。君達の様な志士浪人仲間の力を借らざるを得ない、我輩は其筋の内命を受け或る特別任務の計畫を立てたのであるが、ドウダイ一つ君も加盟して呉れないか、」

青木大佐は其の魁偉なる面相に不似合の細い而もハッキリした言葉にて語り出した、横川は巨眼をグル／＼させながら最も熱心に敬聽しつゝあつたが、其一文字に結んだる巨口を開らいて曰く、

「青木大佐、我日本帝國は古來敵國外患少からざりしは歴史の示す處である、而も今回の日露戦争は我邦空前の一大敵國一大外患で獨り

軍人丈りの戦争ではない、我々國民舉つて護國の鬼たるの一大決心を要することゝ思ふ、不肖省三北京に來りしより既に二年と三ヶ月此の間聊か御奉公致したりとは言へ何等誇る可きことはなかつたのである、我輩は今回の一大國難に際し、斷じて袖手傍觀することは出來ない、是非大佐の特別任務に御採用を願ひたいのである、喜んで加盟致したい、固より一身を投げ出す覺悟である、最後の御奉公に思ふ存分奮進努力して見たいのである、然る可く御指揮を仰ぎたいのであります。」

青木大佐と横川省三とは意氣投合せるは勿論、眼前に迫れる未曾有の國難に殉ぜんとする精神に於て全然一致したのであつた、大佐は横川の既に國家に貢獻せる幾多の功勞を承知して居た、之が爲め更に其決死的奉公を強ひなかつたのである、然るに横川は自ら進んで九死一生

否な十死無生の特別任務に参加を申入れたのであつた、彼の殉國的奉公や、眞に岩手男兒の眞面目を發揮せりと言はざるを得ない、義務心に燃へたる彼は義務を盡くして更に義務を盡くさんとする義務心を發揮し、義務の前に一身を投げ出したのであつた。

明治三十四年十月、内田公使の囑託として北京に來れる横川省三は、爾來内外に活動して殆んど寧日なき状態であつた、或は在留邦人間の公共的事業に盡力し、或は官民融和に盡力し、或は支那官民間に出入して日支提携を促進して間接直接に我國家に貢獻したのであつた、或は遠く四川及長江一帶の視察に赴き、或は再三滿洲に於ける露國の經營及軍事状態を偵察し、或は山東又は龍巖浦に微行して幾多有益なる情報を蒐めて我内田公使の参考に資したのであつた、其他彼れの公私兩面に於ける幾多の功勞は殆んど世人に知られざるも、彼の先輩同僚及

知友等は心竊かに彼の功勞を感謝し彼の人格を敬愛しつゝあつた。

彼れ若し尋常一様の有志なりしならば、二年有餘の奉公を以て一ト先づ北京を切り上げたかも知れない、或は久々にて内地へ歸り花巻温泉や東山温泉などに悠々休養したかも知れない、或は奈良京都に遊び山紫水明の境に支那の塵埃を洗らひ遙かに滿洲の戰雲を觀望しつゝあつたかも知れないのであつた、假りに彼れにして北京を引拂らつて内地へ歸臥したりとするも、何人も彼を非難せざるのみならず、多年勞苦せる彼れの歸國を當然なりとし、寧ろ休養閑臥を勸告したかも知れない、なかつた然るに我横川省三は義務を盡くして而も義務を盡くせることを忘れ、更に義務を盡くさんとする日本國民中の熱血男子であつた、二年有餘の奮闘努力を忘れ新に「死」を望んで前進することに決心した青木大佐との會談は、生死交代の一瞬時であつた、而も彼れ横川は生を

欲せずして死を求め、樂に入らずして更に辛苦に向つたのであつた。

阪西利八郎は後日特別任務計畫案の立案當時を追懷して曰く、

「余が特別任務計畫案を立案せんが爲め、筆を採つて一筆を下せる時

は、則ち志士諸君の死を決定したる時であつた」。

當時四十七人の志士何人と雖も生還を期せず、唯だ加盟と共に死あるのみであつた、横川省三が莞爾として青木大佐に加盟を誓へる時、彼の一命は既に北滿の野に投げ出されたのであつた、笑つて死地に入る、眞に岩手男兒に耻ぢずと言はざるを得ない。

四十七志士

北京公使館附武官青木宣純大佐が阪西佐藤兩補佐官と密議の上、採用したる特別任務の志士は實に四十七名であつた、四十七士と言へば

我徳川時代の所謂忠臣義士として有名なる赤穂浪士と同數である、義士四十七名の忠勇義烈は我國民の模範的武士と仰ぐ處、而も其芳名は千載不朽に傳はり永く我國民の精神的指導と爲るのである、斯る國民的精神の表現とも言ふ可き四十七義士と同數なる四十七志士を採用したるが如き、亦以て深長なる意味の存するを知らなければならぬ、青木大佐等が特に四十七名の志士を採用したるは、實に忠勇義烈に於て古今一貫せる我國民的精神を汲み取り、今日に在つても尙古へと同じく殉國奉公の志士存することを知らしめんが爲めであつたと思ふ。

四十七士、嗚呼如何に勇ましい面々なりしよ、元祿時代の四十七士は徳川武士の花として永久に其芳香を放つて居る。明治三十七年初春の四十七士は我が邦志士中の志士として、其雄風を仰がるゝに至つた、元祿時代の四十七士は主君の仇敵吉良某を相手としたるも、明治時代の

我四十七士は實に世界の帝國露西亞を相手としたのであつた、其舞臺の大小其事の難易、到底同日の談にあらざりしや勿論である、然れども一死以て事に當れるに至つては則ち甲乙なしと言はなければならぬ、青木大佐の特別任務班に加盟したる我四十七志士の面々は孰れも一死を以て事に當るの決心を有したるや勿論であつた、則ち死を捧げて青木大佐の手に之を渡したのであつた、何人も生還を期するが如き俗念を抱かなかつたのであつた、例へ四十七士中の三十九士は武運強くして再生を得たるにもせよ、是等の面々は幾度か死地に入つたのであつた、況んや北京出征の際は、一人として生還を欲せざりしに於てをや、而も死を以て事に當り遂に死を迎へて永久其雄姿を見る能はざる、伊藤篠田兩武官及横川沖松崎田村脇中山等の忠勇義烈や眞に千載の後らまで其芳香を遺すこと當然である、過去に於て然りしが如く將來

若し一大國難を迎ふることあらんか、必ずや四十七士の名を以て其殉國奉公者中に見出すに至るであらうと思ふ。

特別任務班の四十七士(將校五名を含む)は青木大佐等の選拔せる丈けありて孰れも立派なる人々であつた、現役將校六名を除ける四十二名に就て之を討檢すれば、略々左の如き經歷年齢等であつた。

(一) 年齢に於ては年長者四十歳にして年少者は十九歳平均年齢二十六歳に當る。

(一) 學歷は中學校卒業以上にして東京外國語學校一ツ橋高等商業學校卒業生あり、地方の師範學校卒業生あり、早稻田大學明治中央其他の大學卒業生ありて皆な相當の智識階級に屬したる人々である。

(一) 職業は横濱正金銀行員、新聞記者學校教員、會社員、陸軍通譯官、支那側顧問及傭聘員其他孰れも獨立生活を營める人々である。

(一) 特記す可きは是等の人々は支那各地に在住し多年支那研究に熱心し若くは日支親善に努力したるもの多數を占めて居る。

(一) 所謂孟子の恒産なくして恒心有る志士の風格を有し其人格高潔に其操守堅實なる人々にして在留官民間に推重せらる。

(一) 柔道三段の人初段の人々其他劍道に達したる人々少からず孰れも壯健なる體格を有し、而も品行に於ても非難を被れるが如きこと少なき人々である。

(一) 永きは十年以上少くも三年内外支那在住の人々なれば支那事情と支那語に通曉し支那人に變装して殆んど支那人らしき人々を採用せられたのであつた。

夫れ斯くの如く青木大佐の採用したる特別任務班の志士等は所謂燕趙悲歌慷慨の壯士にあらずして、寧ろ社會的指導者の位置に在る壯年

紳士の人々であつた。腕力よりも頭腦の人を主とし、蠻勇よりも沈勇を取り短氣よりも忍耐を選んだのであつた。左れば是等の志士にして若し軍人であつたとせば、孰れも優秀なる將校たる可き人々であつた。是等の志士を統率す可き班長其人の選定を慎重にし、而も一粒選りの現役將校を以てしたる青木大佐の苦心や察す可しであつた。

特別任務班の班員は必ずしも優良なる待遇とは言へなかつた。其収入の上から言へば却つて減少したる人々もあつた。例へば某志士の如きは銀行員として月収五百圓を得つゝあつたに拘らず特別任務班に加盟して其俸給月額二百五十圓に減少した位であつた。某氏の如きは會社幹部として月収六七百圓以上であつた。而も収入を眼中に置かずして國難に其身を投げ出したのであつた。北京警務學堂教習は位置安全に収入亦月額三四百圓以上の好身分であつた。然るに同教習を辭

して特別任務班に加盟せるもの實に十名内外に上つたのであつた、其他一々調査すれば収入目的を以て加盟せる志士は殆んど之を見出すことが出来ないものであつた、眞に是れ名利を度外せる報國的精神の流露であつた。

青木大佐の人物選抜は頗る嚴重であつた、人物選抜と共に其採用に當りては再三其人の決心如何を試験して最後の斷定を下した位いであつた、之が爲め幾多の悲喜劇の演ぜらるゝありて或は志士等を發憤せしめ或は快哉を叫ばしめたこともあつた、熊本の人堀部直人は陸軍豫備少尉にして當時北京八旗中學堂(日本の學習院に當る)の教習であつた、彼は溫厚篤實の好紳士で而も國難に殉ぜんとする熱誠に燃へつゝあつた、青木大佐の特別任務計畫を探聞したる彼は或る日親しく公使館附武官室を訪問した。

「大佐殿、私は不肖ながら豫備陸軍歩兵少尉であります、今回の征露役には是非従軍して御奉公を致したい決心であります、聞く處に依れば大佐殿に於かれては特別任務の御計畫を立てられ其班員を御募りになるとの由、ドウか私を採用して下さい、一身は固より國家へ捧ぐる決心であります、」

磊落にして人に接する最も藹如たる青木大佐は心中深く堀部直人の熱心を感じながら而も冷靜なる態度にて答ふらく、
「ヤ、堀部君、折角の御志願じやがモ、満員と爲つた、或は第二の特別任務班を編成せにやならんかも知れない、ドウか後日にして呉れ玉へ、亦君の御相談に乗る時が来るかも知らぬと思ふ、」
堀部は再三押し返して採用を懇請した、然るに青木大佐はドウしても承諾せなかつた、茲に於て堀部は悄然として歸宅し一室に閉ぢ込もつ

て失望の體であつた、彼は種々の事情を考ふると共に青木大佐の拒絶に就て頗る神經過敏と爲つた、ドウも可怪しい、再三熱心に申入れても冷淡に拒絶さるゝとは頗る不可解である、我輩は一身を投げ出して居る、豫備役とは言へ我輩も帝國軍人である陛下の將校として國難に當らざる可からざる義務を持つて居る。是非とも特別任務に加入して奮闘したいものである、然るに青木大佐は我輩の志願を容れない、拒絶するに後日を待つ可き旨を以てした、ドウしても可怪しい、大佐は何を以て我輩を採用せないであろうか、我輩も家庭に種々の事情を持つて居る、或はソンの點が青木大佐の耳に這入つたのではなかるふか、否々決して然らず、家庭の私事を以て我輩の採用を可否するが如き青木大佐ではない、左ればとて何故に拒絶されたのであらう、我輩の希望は決して此の儘投げ棄つることが出来ない、モト一度青木大佐を訪問して嘆願して見ようか知ら、否々最早や駄目に相違ない、嗚呼今回の機會を逸するに於ては堀部直人、家名を揚げ熊本武士の面目を發揮す可き機會を迎ふることが出来ない、思へば思ふ程、考ふれば考ふる程、如何にも残念に堪へない、河崎松岡等の友人は既に採用せられて意氣昂然、滿蒙に活動せんことを期して居る、然るに獨り我輩は採用を拒絶せられ徒らに北京城内に閑日月を送るのみである、眞に我れながら不甲斐なき我が身である。

堀部直人は頭腦に痛みを覺ゆる位ひに考へ込んだのであつた、斯くて餘り壯健ならぬ彼は心神の悩みと共に益々煩悶に煩悶を重ねたる結果、明治三十七年二月十四日を以て八旗學堂教習官舎内に於て自殺するに至つた、彼の自殺は如何にも武士の作法を守れる立派な切腹であつた、實に意外なる出來事にして特別任務班に伴へる日本武士的悲

劇の一齣であつたのである。堀部直人の自殺は北京在留邦人を驚愕せしめたるは勿論、最も驚けるは青木大佐であつた。大佐は直に馬に鞭つて八旗學堂内に驅け附けた。途中前方より馬を走らせ來る警務學堂監督川島浪速に出會した。大佐は「堀部が自殺したぞ」と告げながら馬を飛ばして往き過ぎた。川島は之を聞くや馬を引返して青木大佐の後を追ふて八旗學堂に向つた。横川等の志士仲間も其隠れ家を飛び出して八旗學堂に赴いた。記者連中は勿論苟も堀部と面識ある邦人は殆んど其悲壯なる最後の場所に臨んだのであつた。

青木大佐は堀部の遺骸に近づきながら涙を揮つて其死を惜んだ。「堀部君、早やまつた事をした。我輩は決して君の志願を拒絶したのではなかつた。既に豫定の員數を採用したので不得已君を第二の場合まで待つて貰ふことにした。嗚呼君は誠實の人である。一死以て國難

に當る可き志士である。我輩は君の如き立派なる人物を失へるを眞に残念に堪へない」。

特別任務に採用され將に出征せんとして某所に集合中の志士連中は堀部の自殺に感激して意氣大に揚れるは勿論、誓つて堀部の遺志に添はんことを決心した。堀部の死に臨んで自己の志望を書き遺したる書き置は、直に青木大佐の手に收められたるが其書き置たるや、實に句々血を以て滲み言々殉國的精神に燃へたるものであつた。青木大佐は之を讀んで泣き出した。阪西少佐も佐藤大尉も暗涙を催ふして故人を悼んだ。堀部の親友河崎松岡等は聲を擧げて泣いた。横川も沖も松崎等も其の死を痛むと共に各自悲壯の決心を抱くに至つた。堀部直人の自殺は在留日本人一般を感憤せしめたるのみならず、支那側官民間に於ても非常に感動せる模様があつた。袁世凱は秘書金を派して其の葬

儀に參會せしめ、外務部尙書那桐は陶大均を非公式に同葬儀に參列せしめたのであつた、其他八旗學堂總辦鎮國將軍毓朗、肅親王、那圖彥親王等の如き孰れも部下を派して參葬せしめ、堀部の殉國的自殺に畏敬の念を抱いたのであつた。

北京の支那人側は日露戦争に對する日本人の決死的態度を見て、心窃かに日本の勝利を信ずるものを生ずるに至つた、八旗學堂生徒等は主として北京滿洲旗人の子弟なりし爲め、其教習堀部直人の自殺に就て異常の感應を被つたのであつた、彼等所謂支那の貴族社會に屬する公達は堀部先生の死を以て出征に漏れたる爲めであると思ふ、則ち堀部先生は日露戦争に従軍する能はざる爲め一死以て殉國的精神を示して日本國民を激勵したのであると信じ其愛國心の旺盛なるに驚歎したのであつた、彼等は日本人にして既に斯る決死的精神を有す

る以上大國露西亞に對し敢て敗戦せざる可しとの感想を抱くに至つた。斯る感想を抱くことゝ爲れる支那人側は、言ふまでもなく日本に同情を寄せ間接に日本の利益を計つたのであつた、實に堀部直人の死や決して犬死にはなかつた、間接に多大の効果を與へ直接に志士をして益々奮進活躍せしむるに至つたのである。

堀部直人の自殺は之を元祿時代に於ける赤穂義士に比すれば、恰も茅野三平の自殺に似たりと言はなければならぬ、赤穂義士の一人に堀部安兵衛なる豪傑の士があつた、此の人舊細川藩に預けられ其邸内に於て切腹したのであつた、然るに細川侯深く堀部の忠死を惜しみ其幼兒を家臣某に養育せしめ、遂に堀部某として家臣の列に加へたりといふ一説がある、而して堀部安兵衛の子孫は則ち堀部直人にして、直人は祖先の血液を享けたればにや、祖先と同じく切腹して其義氣を發揮し

たのであつた、元祿時代の四十七士中の一人を祖先としたる堀部直人が明治時代に於ける一大國難たる日露戦争に際し、特別任務の四十七士に加はらんとして切腹したるが如き、實に古今同例の悲劇なりと言はざるを得ない。

既に特別任務に加盟したる横川省三は眼前に演ぜられたる堀部の悲劇を見て其忠愛奉公の精神、ますます燃へ上れるや勿論であつた彼は心靜かに遠征の用意に従へるならんが、而も表面依然として快活卒直の態度にて在留官民の間に出入しつゝあつた、彼は秘密裡に運ばれたる一大計畫に就て全然之を口にせざるのみならず、其態度に於ても何等平生と異なるものを見なかつた、例の如く來り、呵々大笑して去り悠々和酒を酌んで快談し、時々斟をかひて酔臥し亦何事の其心を煩はすもの無きが如き様子であつた、而も彼れ亦人間である、豈に胸中幾多

の感慨なからん哉。

特別任務班の出征

明治三十七年二月八日、滿を持して放たざりし我東郷艦隊は遂に水雷艇隊を放つて旅順口外碇泊の露國東洋艦隊を襲撃せしむるに至つた、是より先き露國は日本の提議に對し何等満足なる回答を與へざるのみならず、旅順大連其他の武備を着々進行せしめ、海軍も亦日夜戦備を整へて戦時行動を示したのであつた、則ち日露間の状態は既に正月下旬以來戦時状態に入れりと言はざるを得なかつた、茲に於て彼我共に自由行動の時機に入り唯だ第一攻撃の決行を期待しつゝあつた、二月八日の我水雷艇隊出動は實に機先を制したる軍略的攻撃であつた、若し一日を後るれば彼れ或は我艦隊根據地を襲撃したるや察す可し

であつた、果然我水雷艇隊の襲撃は敵國海軍に少からざる損害を與へ我陸海軍の作戰に非常に有利なる効果を及ぼした、敵海軍の狼狽に乗じ我東郷艦隊は引續き猛烈なる砲撃を加へ以て敵艦隊をして旅順港内に屏息せしむるに至つた、敵艦隊既に海上に出動する能はざる以上我陸軍は安全に朝鮮半島に輸送せられ續々平壤以北に兵力を集中したのであつた、第一軍司令官黒木大將は近衛第二第十二の三個師團を統率して鴨綠江岸に進出した、鴨綠江を挟んで相對せる日露兩軍は歐亞空前の戰鬪を開始したるが我軍の勇戰苦もなく露軍を破りて大勝利を占めたのであつた、黒木軍の鴨綠江を渡りて滿洲の一角を占領するや、第二軍奥大將は第一第三第五の三個師團を統率して金州半島に上陸した、金州を占領し南山の露軍を破りて敵を旅順方面に追ひ込んだる奥軍は北方へ進撃し得利寺に強敵を撃破して南滿半島の一半を

占領するに至つた、斯くて第三軍乃木大將は第十一第七及混成旅團を統率して大連に上陸し、直に旅順包圍攻撃に移つたのであつた、第一第二第三軍相次いで豫定の行動を進むるや、第四軍野津大將は第十第四第九の三個師團を統率し狍子窩一帶に上陸して鳳凰城方面へ進撃し第一第二の兩軍と策應して露軍の根據地たる遼陽に向ふことゝ爲つた、實に是れ日露戰爭初期に於ける我陸軍の大運動にして我海軍も亦旅順の敵艦隊を封鎖し旅順港口の閉塞に壯烈無比の大活動を開始するに至つた。

滿洲を舞臺とする日露の戰爭はいよゝゝ發展した、露軍の總司令官クロバトキン大將は、遼陽に本陣を置き三面より北進する日本軍を喰ひ止めん爲め續々兵力を集中した、歐露本國よりの軍隊は西伯利亞及東清鐵道に依りて非常輸送法の下に輸送せられつゝあつた、日本も亦

全國力を擧げて征露に奮進しつゝあるも如何せん其兵力の如き、到底露國に及ばないや勿論であつた、唯だ我軍の精銳なると我軍略作戰の巧妙とは彼れ露軍を惱まし絶へず勝利を得せしめたのであつた、而も最後の勝敗如何は我國民の齊しく危疑する處であつた、露國に於ては局部の戦鬪に不利なるも大局に於て遂に勝利を占む可きことを信するものゝ如く、連戦連敗に拘らず不撓不屈の行動を以て我軍の進撃を阻止せんとした。

北京公使館附武官青木大佐は開戦と共に滿洲軍總司令部附と爲り身は北京に在るも出征戦鬪部員の一人と爲つた、戦局の發展と共に北京より山海關方面に出張して親しく部下の行動を指揮することゝ爲つた、青木大佐は二月八日の旅順口襲撃に由りいよ／＼日露開戦と爲れるを以て、直に特別任務班の出征準備を内命した、現役將校にして班

長の任務を帯びたる橋口井戸川伊藤篠田津久井等の面々は孰れも微行して北京に入り、特別任務の志士等も亦三々五々北京に集りて、其集合所たる北城内樸園蒙古那親王の別荘に假寓したのであつた、是等四十餘名の志士は其決死的精神に於て現役軍人に劣らざるも、戦術其他武器の取扱ひや鐵橋爆破の作業などには所謂素人仲間過ぎなかつた、之が爲め豫め一ト通りの智識及作業を練習することゝ爲り、或は工兵的作業に或は乗馬の練習に或は銃砲の操縦法に各々熱心に研究したのである。

斯くていよ／＼出征の首途は近づいた、茲に於て園内の庭上に祭壇を建設し長くも皇祖天照皇太神を奉祀し嚴肅なる祭典を執行した、青木大佐以下各武官及特別任務班員一同整列し、先づ橋口少佐の奉告文朗讀あり、青木大佐の訓示及び祭文捧讀あり、更に各自神前に拜跪し天

地神明に誓つて大日本國家の爲め身命を捧ぐることを表白した、實に當時の光景は森嚴の氣迫り一同肅然として聲なく唯だ殉國的決心の閃らめくのみであつた、一人として生還を期するものなく所謂生別の握手を交換して各自其の任務に當らんが爲め各方面に出發するに至つた、勿論北京出發は最も秘密にして内外共に其時日を知らない位ひであつた、而も彼等は孰れも支那人の服裝を爲し又は蒙古人に變装したるが故に其出發するに當りて容易に日本人たることを知ることが出来なかつた、二月十五六日頃より先發隊の北京を出づるあり漸次或は騎馬にて或は徒歩にて或は支那馬車にて或は驢馬にて或は汽車にて出發して滿蒙方面の虎穴に向つたのである。

第二班長に任命せられたる横川省三は、既に「死」の任務を引受けながら依然快活なる態度を以て在留邦人間に出入しつゝあつた、彼は表面頗る快活なりしが如きも、暮夜一室に閑居したる際、種々感慨無量に堪へなかつたであらうと思ふ、或は故山の妻子を懷ふて暗涙を催ふしたこともある、或は先輩知友の健康を祈りて多年の知遇を感謝したこともある、或は過去に於ける自家の經歷を追懷して微笑を漏らしたこともある、或は一大國難を迎へて一身を捧ぐるの快哉を覺へたこともある、或は特別任務の容易ならざるを知り自己の責務重大なるを痛感したこともある、要するに流石豪快の横川もいよゝゝ出征に際しては、豈に多少の感慨なからんや、時に默座沈思しつゝありしことも當然であつた、況んや多血多感の熱情を有する彼れが「一去不亦還」の決心を以て二年有四ヶ月間在住したる燕京の地を見棄てんとするに於てをや、二月十日の夜、某新聞記者宅に阪西少佐と記者某と會飲中折からの雪を掃らひながら横川省三が來訪した、好朋友來る、三人は盛んに痛飲

した、種々の快談を交へて夜の更くるを知らない位ひであつた、三人中最も酒豪は阪西利八郎で一升位ひは平氣の平左で二升酒に少々酔ひ三升に到つてやゝ陶然たる位ひの酒客であつた、記者某は酒客の名聲こそ揚がりたれ、其酒量に於ては漸やく一升位ひであつた、若夫れ横川に至つては殆んど其酒量を知ることが出来なかつた、彼の酒座振りは頗る賑やかなものであつた、快談朗吟時に踊り出すこともあつた、盃を舉げて乾盃するや乾盃亦乾盃五六盃を續くるが如きこともあつた、支那官吏でさへ横川の乾盃攻めに避易することがあつた、而も彼の亂醉せるを見ること稀れであつた、況んや醉臥亂舞の狂態を演ずるが如き全然之を横川に見出すことが出来なかつた、彼は時に由り一二升を飲むことがあつたかも知れない、然るに何等の醉態を示さず悠々微笑して座客と應酬しつゝあつた、彼の酒量如何は實に知友間の疑問とする處であつた、或は阪西少佐に勝るも劣らざる酒客であつたかも知れぬ、而も其優劣を知ることが出来ないのであつた。

『ヤー好い處に来て呉れた、横川、君と阪西さんと孰れが飲めるか、一ツ飲み競べをやつて呉れ玉へ』

主人公の記者某が横川を迎へての挨拶であつた、座に就くや否や二三盃を飲み續けたる横川は、莞爾として曰く、

『ウム承知した、阪西さん、しばらくの御別れです、今夜は大に飲んで一ツあなたを飲み倒して遣るぞ、時に酒の用意は大丈夫かね、酒が不足しては酒戦の勝敗を決することが出来ない』

『ハハア、面白い横川と僕との酒合戦か、當分の御別れだ、ハアハア……』
 阪西少佐の陽氣なる笑聲は一座をして益々賑やかならしめた、言ふまでもなく横川の出征は眼前に迫つて居る、今夜の來訪は告別の爲めで

あつた、否な生別の意味を含める最後の訪問であつた、記者某固より能く之を知つて居た、阪西少佐も無論之を承知して居たのであつた、茲に於て珍らしくも酒相撲番附の關脇たる阪西利八郎と張出し小結格の横川省三との飲み競べと爲つた、酒は勿論日本酒で而も特に軍隊酒保からの買入を許され居る爲め、一斗でも二斗でも直に間に合ふのであつた、北京城内東單牌樓三條胡同西口路南の記者某宅の夜宴は、實に天真爛漫の光景を呈したのであつた、夕刻から降り出したる雪は霏々として止まず夜半に入りては庭上に一寸位ひを積むに至つた、白雪の庭前には横川の乗り來れる栗毛の馬が繋がれて居た、室内に於ける酒戦はいよ／＼酣と爲り、且つ飲み且つ談じて亦夜の更くるを知らなかつた位である。

主人公の記者某は既に酔臥して前後不覺の體たらくであつた、一升

格の酒客は到底三役仲間の敵ではなかつた、既に三四升を飲み盡くしたる兩雄はやゝ酔ひ心地と爲れるものゝ如く互に談笑して如何にも愉快らしかつた、阪西少佐は横川をからかつて曰く、

『を梅も随分働らいて呉れた、君のは勿論其他志士連中の襦袢やら襦鼻褌までも縫ふて呉れた、を梅のことは僕が引受けた、何んとか始末するから安心し玉へ』、

『ウムを梅のことか、左様言へばを愛も亦種々盡くして呉れた、君の内訓かも知れないがを愛は僕等仲間に御守り札や、さらし木綿や賣藥類などを贈つて呉れた、ドウかを愛君にもよろしく傳へて下さい』、

兩雄の口頭に上れるを梅とかを愛とか言ふ女性は、當時北京の邦人花柳界に於ける女中頭又は藝妓であつた、彼女等は夫れとなく志士浪人等が決死的任務に就くことを悟り、種々其の準備を助くることに熱心

した、或は肌着を作りて贈り或は守り札を送りて武運長久を祈り或は賣藥類を贈りて同情を表するなど、所謂俗氣離れての意氣を寄せたのであつた。

斯くて兩雄の酒戦は翌十一日午前三時頃まで繼續した。二月十一日と言へば日本國民の最も尊重する紀元の佳節であつた、北京在留邦人は旭旗を掲げて日本帝國の天壤無窮を仰いだ、北京の市街は白雪皚々たる光景と爲つた、阪西少佐は陶然として酔へるも其態度を崩さなかつた、意外の酒量を示したる横川も強敵の爲め頗る酔ひ心地と爲つた、彼は遂に阪西さんを飲み倒すことが出来なかつた、阪西少佐も例の通り記者某を飲み倒したるも、横川に對しては、容易に押し倒すことが出来なかつた、突然横川は座を起つた。

『イヤ忘れて居た、昨夜十二時まで樸園に往かねばならなかつた、然し

未だ夜が明けないから差し支へはない、ライ〇〇起きて呉れ、僕はいよ／＼二三日中に出發だ、今夜は御別れに來たのであつた、阪西さん、左様なら、〇〇君左様なら、

彼は門を押し開らひて庭前に出で、直に馬に乗りて手綱をさばいた、將に門前に出でんとして馬上微笑して曰く、

『ドウせ今度は死ぬに極つとる、死んだと聞いたら線香の一本でも立て、呉れ』

『横川、往つて來い、骨は確かに拾つてやるから安心せよ、ドウせ僕等も後とから往くから、何處かで亦會ふかも知れない』、記者某は斯く叫んで横川を門外に見送つた、阪西さんは依然盃を手にして滿を引けるものゝ如く室内から、

『アハーハー往け往けアハーハー』

の笑聲が聞へたのみであつた、夜は沈々として更け、雪はいよ／＼降り積つた、雪を掃らひ馬の手綱をさばきながら降る雪の中に其姿を消し去れる横川省三の雄姿は、今日に於ても眼前に彷彿として現はるゝ位ひである、紀元節の早曉、天黒く地白き時、馬を飛ばして同志の集合所に到れる横川はいよ／＼二月十八日(一説には二十一日)を以て北京を出發して遠く虎穴に向つたのであつた。

横川班の面々

青木大佐と横川との協議に由り第二班々員として沖禎介、松崎保一、田村一三、中山直熊、脇光三の五名が選定せらるゝに至つた、則ち是等の志士は横川を班長に仰ぎ生を異にするも死を共にせんことを誓ふたのであつた、中山直熊は熊本の人、熊本縣立濟々中學を卒業するや支那大陸に遊ばんことを志し同郷の先輩嘉悦大尉(騎兵大尉にして其後少將に昇進す)を便りて北支那天津に渡つた、當時嘉悦大尉は直隸總督袁世凱に招聘せられ保定軍官學堂の教官として同地へ在留中であつた、中山は保定に赴き嘉悦の世話を受けて同居し其助手を勤めつゝあつた、明治三十六年の三月を以て支那に渡れる中山は保定に居ること六ヶ月にして天津邦字新聞北支那日日新聞社に入社したのであつた、彼は純真なる青年にして資性剛毅誠實、先輩に對するに敬を以てし、友人と交るに信を以てし、頗る先輩より愛せられ同輩より信頼せらるゝに至つた。

中山は濟々中學在校中、既に劍術及柔道に達したる武士的青年であつた、彼は北支那日日記者として社長木村竹南を援け論說に報道に正々堂々筆陣を張りて在留邦人の指導に熱心した、新聞編輯の餘暇支那

語を學び以て他日の用に供せんことを期しつゝあつた、彼が横川と相知れるは保定時代にして當時横川は北京より保定に遊び嘉悦大尉宅に於て中山と相會し一見其人物を喜び爾來或は天津に於て或は北京に於て交誼を重ねることゝ爲つた、青木大佐の特別任務計畫を立て、班員を採用するや、天津在留の中山は同僚脇光三と共に決死的精神を披瀝して志願する處あり、遂に其採用を得たのであつた、彼は青木大佐の採用を得たりとの内報に接するや、歡天喜地男兒の面目此れに過ぎずと爲し、日夜出征の期を待ちつゝありし位ひであつた、彼れ年齢二十一歳の青年なるも、腕力に於て優に壯年人士を凌ぐものあり、鐵拳を固めてロスキ一の鬚面を叩き飛ばさんことを欲し居れる中山の得意や察す可しであつた。

脇光三は舊姓淺岡、信州松本の人なりしも、滋賀縣人脇家の養子と爲

つた、彼は東京の日本中學校を卒業し青年時代に於て早くも頭角を顯はし儕輩に推重されつゝあつた、彼は玲瓏玉の如き好青年にして容貌秀麗資性温厚而も凜然犯す可からざる氣概を有して居た、彼の實父淺岡一は信州出身の一人傑にして夙に育英事業に熱心した、然るに淺岡一の人物を見込める某巨紳は彼をして華族女學校の幹事たらしめ以て上流女性の薰陶に當らしめたのであつた、斯る人を父として生れたる脇光三は中學卒業と共に早くも支那大陸に活躍せんことを期しつゝあつた、彼が北支那方面に渡航したるは明治三十六年の五月頃ならんが、彼は一路平安北京に入り某氏の紹介を以て服部博士宅に寄寓するに至つた、當時北京大學の教習たりし文學博士服部宇之吉は夫人と共に懇篤に脇光三を待遇し且つ其爲人を愛したるは隠れもない事であつた。

斯くて服部博士宅に寓居すること數ヶ月、脇は某氏の推舉を以て北支那日日新聞社に入社することゝ爲り、北京を去つて天津在留の一人と爲つた。天津に於ける脇光三は間もなく邦人間に其名を知られ、特に駐屯軍司令官仙波少將の如きは深く脇を愛して其前途有爲なるに矚目した位ひであつた。斯くて日露間の外交談判いよゝゝ破裂せんとするや、彼れは國難近きに迫れりと爲し心竊かに報國の期あるを待ちつゝあつた。恰も青木大佐の特別任務志士募集の内報あり、彼れ踊躍して志願を申込み、首尾好く同僚中山直熊と共に採用せられたるが實に志士中の年少者であつた。彼は特別任務の決死的冒險行動なるを知れるも、之が爲め却つて意氣昂然寧ろ男兒本來の面目を發揮するものとして大に満足したのであつた。彼が横川と相知れるは北京に於ける某氏の紹介に由れるが、爾來再三會合して互に其人物を敬愛しつゝあつた。

彼は横川と共に北滿方面に遠征することを喜び、恰も婦女子が觀劇を喜ぶが如き喜びを以て其出發の時日を待ちつゝあつた。

田村一三は宮崎縣の人、夙に宮崎中學を卒業して北京に來り沖禎介、松崎保一等と共に東文學社の教習として支那青年の教育に熱心しつゝあつた。彼が北京に入れるは明治三十五年十月頃にして實に二十有三の青年であつた。彼が東文學社に従事中、最も意氣投合したるは沖禎介にして兩人の性格殆んど相反するに拘らず其友情頗る密なるものがあつた。當時東文學社の支那人生徒は約四百名の多數に上れるが、支那人生徒に對する教育方針に就て社中兩派に別れて論議さるゝに至つた。總教習中島某に反對せる一派は沖及田村松崎等の面々にして彼等は遂に同社を辭任し新に北京城外に文明學堂を創立したのであつた。文明學堂は主として沖田村外三名に於て經營したるが支那人生徒

は二百五十名に上り一時東文學社と對峙する勢ひであつた、田村は温厚篤實の好青年にして殆んど人と相争へるが如きことを見ず、何人も彼を敬愛せざるものなく彼れ亦何人に對しても友愛の情を寄せつゝあつた、然れども彼の操守嚴として動かす可からず、所謂八方美人主義の人にあらずして時に秋霜烈日の氣魄を發揮することがあつた、彼は沖の女房役として最も適當で、沖と彼とは所謂採長補短の關係に在りしと言はざるを得なかつた、彼は同郷の先達たる青木大佐に知られ居たるを以て大佐の特別任務計畫に際して其志願を容れられ班員の一人に採用せられたのであつた、彼は特別任務に採用せられたることを男兒無上の愉快と爲し一死以て國難に殉ぜんことを誓つた、彼は平素温和にして何等勇氣を有せざるが如きも彼の心中には金剛心とも言ふ可き英邁なる大勇を藏して居た、教壇に於て慈父の如き田村一三も

滿蒙の野にロスキーと相戦ふ場合惡鬼の如く奮闘して敵を斃さずんば已まざるや察す可しである、彼は最も困難なる方面を擔任する第二班に参加し且つ友人沖松崎等と死を共にすることを喜び一日も早く出征の途に就かんこと待ち受けつゝあつた。

松崎保一は宮崎縣の人、宮崎中學を出で、一年志願兵として軍隊生活に這入つた。兵舎生活を終ふると共に豫備少尉と爲れるが、一時小學教育に従事した、松崎は資性温順和平にして郷里に信望あり、父母に仕へて孝、友人と交つて信、善く弟妹を愛して家庭團欒の中心と爲つた、彼は幼にして母を喪へるも能く繼母に仕へ殆んど眞實の母子關係を見たる位ひであつた、繼母に奉ずること實母に仕ふるに優るも劣らざる孝心を抱けるのであつた、郷里の父兄、齊しく其孝心を感じ子弟を訓ふるに松崎保一に習ふ可き旨を以てしたといふことであつた、實に忠臣

は孝子の門に出ずとは古聖の言、我を欺かずと言はざるを得ない、松崎は東洋の形勢を考へ早晚支那大陸に一大風雲の發生するを豫想し、斷然故山を辭して北支那へ渡航したるは明治三十五年八月頃であつた。天津に於ける松崎は某氏宅に寄寓して北京語を勉強しつゝあつた、然るに彼は北京東文學社の設立を聞き天津より北京に赴いて同社の教習として支那人教育に従事することゝ爲つた、彼は育英事業の經驗を有するが故に問もなく同社に重んぜられ支那人生徒間に於ても頗る名望を博した、彼の名望は支那紳士間に傳はり遂に正定府々立中學校教習月俸三百五十元に招聘せられたのであつた、正定府は直隸省南部の一都會なるが、同地に日本人教育家の招聘を見たるは、實に松崎を以て最初なりと爲す、亦以て松崎の名が如何に支那紳士界に知られつゝあつたかを推察することが出来る、青木大佐は既に同郷の青年たる

松崎保一を知り居れるを以て、特別任務の班員採用に際し、彼を選定したのであつた、沈毅にして實行力に富める彼は青木大佐の眼識に違はず、特別任務の一人として最も適材であつた、彼は豫備將校として國難に殉ぜんことを決心し居れる際、特別任務の決死班に加盟するを得て快然正定府を辭して北京へ入り、靜かに遠征の期を待ちつゝあつた。

沖禎介は肥前平戸の人、資性剛邁不屈、夙に支那大陸に活躍せんことを志し、義和團事變後間もなく北京へ遊んだのであつた、當時北京天津に於ける我邦の志士浪人連中は、殆んど國家的奉公心を抱けるが故に其言行や頗る高潔なるものがあつた、沖は固より自ら志士を以て任じ居れるが爲め日夜同志と往來して東亞の時局を論じ支那問題を談じて共に他日を待ちつゝあつた、彼は保定軍官學校の助教諭として支那將校教育に従事した、保定在住中激烈なるコレラ病に罹り殆んど死中

一生を得、病後の保養の爲め辭職して北京へ歸臥した、北京に於ける彼は東文學社に従事したるが教育及經營上の意見に衝突を生じ、遂に彼れ一派は同社を脱し新に文明學堂を創立するに至つた、則ち文明學堂は主として彼れ及田村一三の經營で支那人青年を教育して日支共存共榮に貢獻するを目的とした、彼は或る日二百餘の生徒を集め演説して曰く、

『諸君、試みに滿洲の空を仰いで見玉へ、露國の魔手は全く滿洲を占領し今や日本は其魔手を拂ひ除けんが爲め努力中である、諸君、日露の開戦は眼前に迫つて居る、若し日露開戦の場合、諸君は果して如何なる態度を採らんとするか、日本の對露宣戦は支那の爲め滿洲より露國を追ひ出さんが爲めである、則ち日本は支那の爲めに露國に向つて戦闘を開始するのである、果して然らば諸君は一致して日本を支

持し日本と共に露國を征伐せなければならぬ、諸君若し我輩の説に賛成せば乞ふ手を舉げよ』

彼は意氣昂然机を叩き聲を勵まし生徒等を睨んで舉手を命じた、茲に於て二百餘名の生徒は彼の熱心に動かされ滿堂一致双手を舉げて日支協力に賛成したといふことであつた。

沖と横川省三とは如何なる機會に相識れりやは不明なるも、最も親密なる友人であつた、沖は横川に兄事したるもの、如く、横川は沖を敬愛して互に隔意なき交情を重ねつゝあつた、宴席に於て若し沖にして亂醉せんか、横川は能く彼を介抱して失態なからしむることに注意したるが如き、實に兩人の間柄を窺ふことが出来るのであつた。

青木大佐が沖禎介を特別任務班に採用したるは、確か横川の推舉に由れるもの、如くであつた、左れば志士連の役割りを定むるに當りて

も沖は特に横川班に割り當てられたること當然の次第であつたと思ふ、特別任務に加盟したる沖はいよ／＼最後の御奉公なりと決心し靜かに出征の用意を爲した、彼は保定に於て既にコレラ病の爲め死去せんとした、而も九死一生を得たる彼は今更ら死を恐れざる底の決心を抱いて居た、國難に殉ずるは男兒本來の眞骨頂である、既にコレラ病にて斃れたりと觀念せば如何なる困難も、豈に突破せざる可けんや、生年二十八歳親友横川と共に遠く北滿の虎穴に向はんとする沖禎介は、燃ゆるが如き勇氣を内に蓄へながら表面冷然として出征の首途を待ちつゝあつた。

夫れ斯くの如く第二班々員と爲れる五名の志士等は、孰れも横川省三と相識の間柄であつた、或者は横川と莫逆の友人であつた、或者は横川に心服し、或者は横川に兄事しつゝあつた、中山直熊の直情逕行、脇光

三の頭腦明敏、田村一三の調和的才能、松崎保一の言咄行敏、沖禎介の剛邁不屈、凡て是等の性格を統一し能く其融和を計りて和氣洋々たらしむるに至つては、則ち横川省三の長所なりと言はざるを得ない、五名の志士孰れも傑出したる人物であつた、彼等の前途は頗る有望視せられたのであつた、各々本領を有し敢て人後に落ちざるの自信を持てる面々であつた、夙に東洋問題に注意し絶へず支那研究に熱心し一朝國難を迎ふるや快然身を捧げて死地に入るが如き實に志士の名に耻ぢずと言はなければならぬ、彼等は敢て名利を欲せず、唯だ國家の爲め其義務を盡くさんことを欲するのみであつた、彼等は純眞なる青年にして何等の俗念なく何等の野望なく、實に我邦青年中の青年であつた、非戦闘員にして最も危険なる戦闘區域に活躍した、死地に向ふこと恰も歡樂境に向ふが如き態度を以てした、喜び勇んで虎穴に入り死を知ら

ずして死を迎へたのであつた、就中脇光三中山直熊の如きは志士四十七名中の年少者で生れて始めて始めて、國事に走り遂に其儘國事に斃れたのであつた。

第二班長横川省三は班員として會心の知友を選定したので、衷心満悦に堪へなかつた、彼は六體一心と爲りて雲山千里の北滿に出征するのであつた、幾多の辛苦困難を迎へたるも、同志一行は殆んど平然として山野を踏破した、彼等は死地に向ふことを忘れ、唯だひたすらに雄壯なる希望を抱いで前途を急いだのであつた、第二班の北京出發は明治三十七年二月十八日頃であつた、彼等は變装の上微行して出發せる爲め、内外共に其消息を知るものがなかつた、踊躍して長征の途に上れる彼等の雄姿を想へば、眞に悲壯の感に堪へないのである。

首を俯して家郷を懷ふ

横川班の面々は班長横川の外、凡て是れ獨身者であつた、然れども彼等には父母あり兄妹ありて孰れも家郷を懷ひ出さざるを得なかつた、重大なる時局に當面し國難を迎へたる爲め其の公的精神を以て私情を抑へつゝあるとは言へ、月に對し花を眺めて、時に父母を懷ひ出すこともあつた、雨の夜や雪の夕に兄妹を偲ぶこともあつた、況んや死地に向つて出征せんとするに當りては、如何なる豪傑と雖も家郷を懷ひ出で、多少の感慨なきを得ないのである、妻子を有するものは勿論、獨身者に於ても既往を追懷し故山の情に堪へないのは人間として免る可からざる情緒である、鐵心石腸の横川省三もいよく其擔任方面決定するや、多少其胸中に波動を起さざるを得なかつた、彼は二月初旬折か

らの嚴寒を幸ひに數日間休養閑居した、彼の閑居したる場所は特に親友なる知人三四の外、殆んど知られて居なかつた、彼を訪問したる島川毅三郎は後日、横川との最後會談とも言ふ可き當時の談話に就て左の如く述べた。

『いよく、近く出發するので、さすがの横川も三四日例の場所に引込んだ、僕が往訪すると非常に喜んで早速酒を命じて快談した、横川は何時になくシンミリとした話しを以て僕に聞かして呉れた、彼れは死んだ夫人に就て珍らしくも追懷談を試みた、横川夫人は横川の米國在留中病死せられたるが死に臨んでも彼の無情を恨まず寧ろ海外に苦勞しつゝある主人の無事を祈りながら瞑目したといふことであつた、彼れは青年二十有二にして結婚し間もなく女子を得て頗る歡喜し自己の名を取りて「勇子」と命名した位ひであつた、夫人は彼

れより一ツ歳下で溫和にして貞淑な女性であつた、家計豊かならざりし爲め夫人の勞苦は一ト方ならぬものがあつた、彼れ故郷を飛び出して或は政界に奔走し或は獄舎生活を爲し或は貧乏のドン底に沈み或は俸給生活を樂しんだのである、而も時に家族の爲め送金したこともあるが、殆んど内顧の憂ひ續きであつた、夫人は家計を支へながら老母に仕へ幼兒を養ひ成る丈け主人に内顧の心配を掛けざらしむることに苦心しつゝあつた、横川は夫人の苦勞を追懷して言つた「俺れも女房には苦勞を掛けたワ、一日も樂をさせずに死なして仕舞つた、眞に可哀想に堪へないが之れも運命と諦らむるの外はない」、彼は兒供のことに就て最も考へ込んで居た、二人の女兒は殆んど父親の顔を知らずに成長しつゝあつた、豪放なる横川も談一度び兒供に及べば、其巨眼に涙を浮べ首を垂るゝの情態であつた、北京

に來りて既に二年の春秋を経たる彼は平素家族のことを口にせざりしも、今や死地に出發せんとするに當り、一念家族に及んで其心中少からざる動搖を生じたであらうと思ふ』

島川と横川とは多年内田公使の股肱として内外に活動し而も斷金の交りを結べる間柄であつた、島川に對して種々家族のことを談じ又は故夫人を追懷したるが如き横川の片面を窺ふに足るのであつた。

中山直熊は生を知つて死を知らざる活潑々地の青年であつた、彼はいよく出征するに當り其受取れる支給金の一半を故郷の家族に送金し他の一半を以て準備費其他に充てたのであるが、送金と共に其家兄に宛てたる書面は左の通りであつた。

『拜啓皆々様御健在奉賀候小生事支那に來りて益々日本帝國の前途多事多端なるを確信致し候、今回千載一遇とも言ふ可き日露の開戦

に際し青木大佐の特別任務大計畫に加盟することを許され、歡天喜地言ふ處を知らず候、一身を國家に捧げ一死以て君國に殉ずるの決心に有之、不日北京出發某方面に活動の筈に御座候、何とぞ御喜び下され度候、別紙金〇〇〇爲替券を以て送附致候間御受納下さる可く候、妹へも何か買つてやり下さるゝやう奉願候、尙を姉上様に宣敷御傳へ下され度候再拜。』

中山は死地に向ふに當り死を知らざるが如き愉快の情を抱けるのであつた、而も遠征に上らんとする際、遠く故郷を懷ひ姉や妹に對して温かき情意を表したるは實に青年志士の面目を示せりと言はなければならぬ。

脇光三も亦生を知つて死を知らざる純眞の青年であつた、生を知るとは生に執着する謂にあらずして唯だ若き人生を知れるのみとの意

味に過ぎない、脇は父兄を忘れず時に消息を爲し居れるも未だ特別任務加盟の事を通報せなかつた、然るにいよ／＼近く遠征の途に上らんとするが故に左の如き書面を實父淺岡翁に送つたのであつた。

〔前略〕天津より北京に上り〇〇〇を訪問し夜に入りて青木大佐と會話致し候、小子もいよ／＼特別任務班に採用せられ不日北滿方面へ出發のこと、相成候、大日本帝國未曾有の國難に際し一身を國家に捧ぐることは小子の最も愉快とする處に有之候、生還は固より期し居らず、父上様に再び拜顔することは到底出來難しと奉存候、小子の同志は横川沖中山田村松崎の諸氏にして決死的志士のみ、御座候(下略)』

國家の爲め一身を捧ぐるは小子の最も愉快とする處なりとは、何んぞ其言の和樂なるや、生還を期せずとは、何んぞ其言の悲壯なるや、斯る書面を受けたる實父淺岡翁の胸中や果して如何なりしぞ、思ふて茲に到れば唯だ熱涙の滂沱たるあるのみである。

田村一三は特別任務に加盟せるを喜び、其喜びを分たんが爲め特に長文の書面を故山の家父に送つた、其書面の一節に曰く、
〔前略〕日露談判破裂して愈々未曾有の大戦を迎ふること、相成候、茲に於て我青木大佐は特別任務隊を組織し蒙古方面より敵軍の側背を攻撃する一大活動計畫を立てられ候、此の計畫は最も秘密に附せられ内外共に之を知らざりし次第に御座候、小生も幸ひに特別任務班に採用せられ別紙の通り陸軍通譯(高等官待遇)の名義を以てしたる辭令を受け候、不日出征の途に就く筈なれば茲に内々秘密を打ち明け御通知致し候、小生の同志は皆々決死的志士にして愈々出征の上は國家の爲め大に奮闘する決心に御座候、或は此の書面を最後に

首を俯して家郷を懷ふ

當分書面を差出さざるやも知れず候(下略)』
 温厚なる田村一三も特別任務に加盟したるに満足し、意氣大に揚れるものゝ如くであつた、彼は珍らしくも長文の書面を送り渡支以來の自己に關する事態を詳細に通告し、且つ決死的志士の仲間に加はれることを喜ぶ旨を述べて故山の家族を驚かしたのであつた。

松崎保一は豫備少尉として軍人的秘密を守る氣質を有せる爲め、特に故郷に書面を以て特別任務云々を通知せなかつた、然れども彼は人一倍家庭を懷ふ、人の子であつた、繼母を懷ふこと實母に劣らない位ひの孝心深き青年であつた、左れば其れとなく告別の書面を送つて死出の遠征に上れるや察す可しであつた。

沖禎介はコレラ病に罹りて以來身心の健康回復に注意しつゝあつた、軀幹長大意氣剛健の彼は漸次健康を回復して鬼をも挫じく壯夫と爲つた、言ふまでもなく特別任務班加盟は彼れに取り非常なる満足であつた、殊に知友横川等と共に遠征の途に上ることは彼れの衷心喜べる處であつた、彼はいよゝゝ死地に向ふに際し、勿論故山を懷ひ出したのである、父莊藏翁は尙健在で其他家族の如き孰れも達者に暮しつゝあつた、家計豊かに一族健在なれば、彼れに取つては殆んど内顧の憂ひがなかつたのである、彼は出征の數日前、其の親族に當れる市山重作(北京徳興堂主人)を訪問して暗々裡に告別の意を表した。

『アイ重作、僕は一寸旅行することゝ爲つた、行く先は言へないが随分困難な旅行であると思ふ、若し途中で死んだら死後の事は萬事よろしく頼むよ、ナニニ死んでも好い、僕は一年前にコレラで死んで居た筈だから少しも差し支へがない』、

市山重作は北京在留邦人間に知られたる有志肌の一商人であつた

彼は沖等が特別任務に出發することを承知し居れる爲め、其の白々しい挨拶に一矢を酬ひて曰く。

『禎介、往け住け、後事は一切引受けた、立派な墓を建てるから安心して往き玉へが然し成る丈け目出度く凱旋して呉れ』、

横川班以外の志士連中に於ても或は家族に最後の告別を通ずるもの又は先輩知人に其れとなく生別を告げたるものもあつた、孰れも生還を期せざる決死的出征なれば、仰いて寒月を眺むると共に俯して家郷を懐へるは、當然の次第であつた。

筑前福岡の人、奈良崎八郎は義和團事變後北京に在住して有道公司を經營しつゝあつた、有道公司は日支貿易を目的とせる商事會社で所謂有志の人士の手に經營せられながら、比較的有利の狀況であつた、奈良崎は福岡玄洋社々員の一人、夙に東亞問題の研究に熱心し上海の

日清貿易研究所に従事し支那各地を視察したる支那通であつた、彼は日清戦役に陸軍通譯として従軍し再三死地に入出して剛膽の名を馳せたのであつた、左れば青木大佐の特別任務計畫を立つるや、奈良崎の名は先づ大佐の胸中に藏せられたる班員候補の一人であつた、彼は青木大佐の内談に接し其經營中の有道公司を仲間にと託して欣然特別任務に加盟した、彼れ若し飽食暖衣を欲せば依然有道公司を經營して利益事業に努力したであらう、而も彼は先天的志士の精神を有せる玄洋社の一人であつた、日露開戦てふ一大國難を迎へ、豈に私利に汲々たらんや、斷然牙籌を擲つて國家的奉公に一身を捧ぐるに至つた、彼れ出征の途に上らんとするや左の文句を記したる自己の寫眞を某氏に贈つて其の決心を示した。

滿蒙風雲急、志士赴國難、

首を俯して家郷を懐ふ

入死地悠々、笑殺碧眼奴、

福島縣會津の人、井深彦三郎は國民新聞通信員として北京在勤の有志者であつた、彼は幼年時代に神童を以て呼ばれたる位ひの秀才であつた、青年時代早くも上海の日清貿易研究所に遊び荒尾精門下の麒麟兒に數へられたのであつた、彼は支那語に熟達し支那事情に精通したる屈指の支那通であつた、義和團事變の際陸軍通譯として福島將軍に從屬したるが、其後北京に在留して新聞通信員を引受けつゝあつた、青木大佐の舊知たる彼れは特別任務に加盟し某方面に出征することゝ爲つた、彼は將に出征の途に就かんとするに當り、某氏に紀念の自己の寫眞を贈れるが、其裏面に左の和歌を記して所感を述べた。

『筆とるもつるぎをとるも國の爲め

つくすこゝろはかわらざりけり』

新聞記者として國家の爲め努力したる井深は、更に特別任務班々員として砲火白刃の間に出入するに至つた、會津武士の一人たる彼が欣然死地に向へる、豈に偶然ならんや、平和の時代に筆を採つて論陣を張り戦亂の時代に劍を提げて奮然敵に向ふが如き、實に之れ日本男兒の典型なりと言はざるを得ない。

明治三十七年二月の中旬、北京の天地は氷雪に包まれたるも、在留邦人の全身は熱血を以て燃へんとする状態であつた、在留邦人の主なる人々は其れとなく特別任務の大計畫を察知しつゝあつた、志士四十七名の面々は愈々久しく住み慣れたる北京を後とに各自定められたる方面に出征した、三々五々種々變装したる彼等は内外の注目を避けながら滿蒙の天を望んで勇み勇んで旅程を重ねたのである、第二班の一行は騎馬を連れて古北口方面に向ひ北へ北へと進んだのであつた。

横川班は孰れも蒙古人の服装を爲し特に從者として伴へる支那人三名(直隸總督袁世凱が特に好意を以て軍隊内より選定したる支那兵士を變装せしめたる)の先導にて靜かに而かも緊張して馬を進めたのであつた、彼等一行の消息は赤峯まで明かなりしも同地出發以後は全然其の消息を知ることが出来なかつた、内田公使青木大佐其他は彼等の武運を祈り彼等の無事を願へるや勿論であつた。

特別任務班の大奮闘

特別任務班はいよいよ北京を出拂らつた、彼等は各方面に潜行して露軍の右側背を攪亂した、日露の戦局は漸次發展して彼我六十餘萬の大兵は遼陽平野に對抗するに至つた、然るに我が第一第二第四の三軍は連日連夜の猛撃を以て遂に遼陽を占領した、敵將クロバトキンは遼

陽を固守して必死の抵抗を試みたるも我が三軍の爲め勢ひ退却せざるを得なかつた、敵は數萬の死傷と多數の武器類を放棄して沙河線に敗走したのであつた、沙河の對陣は數ヶ月に亘り此間、日露兩軍は漸次兵力を増加した、露國は奉天を根據として飽くまで日本軍の北進を喰ひ止めんと欲し沙河各所に堅固なる防備陣地を構成した、敵將レネンキャンプは我軍の最左翼を迂廻し將に我側面を突破せんとした、之が爲め我軍の一部隊は多大の損害を顧みず惡戰苦闘、漸くにして敵の奇襲を撃退した、斯くて彼我の戦闘間斷なく各方面に演ぜられいよいよ日露の一大決戦を迎ふるの形勢と爲つた。

戦局の發展と共に我滿洲軍の最左翼に連繫して活躍する特別任務班及び遠く東清鐵道線附近に挺進したる特別任務班の任務は愈々重大性を帯ぶることゝ爲つた、各班は部下の蒙古人武裝隊を指揮し、或は

鐵橋を爆破し或は露軍を奇襲して出沒隱顯、旺んに敵を惱ました、赤峯方面より遠く鄭家屯附近に挺進したる井戸川班の如きは、最も奮闘して度々危険を冒した、後日同班員某の追懷談に依れば實に左の如き苦戦もあつた。

北京を出發したる井戸川班は數日を経て新民屯に到着した、同地方は既に露軍の兵站物資徵發地と爲り時々ロスキ一の姿を見出しつゝあつた、左れば同地に入れる井戸川班は假令へ變装し居れりとは言へ寸時の油斷もなく警戒を加へ窺かに前進を始めたのであつた、斯くて遠く鄭家屯附近に挺進して先づ露軍の一部隊と衝突した、敵は支那軍隊の接近し來れるものと想ひ聊か油斷せるに乘じ、突然猛烈なる射撃を加へたので、見る間に敵の陣營混亂した、部下の蒙古武裝隊は勇敢に突進して露兵を走らし我特別任務の班員も夫れ／＼奮躍して或は敵

兵を斬殺し或は銃殺して血祭りに供したのであつた、又或る時は班員二名に部下の蒙古人武裝隊員十數名を附屬せしめ、暗夜に乘じ鐵道線路に潜行せしめたことがあつた、彼等決死隊は露軍の間を潜り抜け首尾好く鐵道線路に忍び込み鐵橋二ヶ所線路數ヶ所に爆薬を装置して美事に爆發した、露兵は忽ち四方より迫りて彼等を包圍した、此の時班員某は近寄る一人の露國將校を馬より斬つて落し其他孰れも血戦して漸く虎口を脱したのであつた。

或る時井戸川班長自ら班員三名と部下の蒙古兵十數名を率ひ四平街附近に挺進して敵情偵察に従事した、然るに早曉天漸く晨ならんとする際、突如露國の一部隊薄暗の裡に現はれて來た、見れば優勢なるドニコサツクの一隊であつた、敵は特別任務班を見出したるものゝ如く早や間近く押し寄せて來た、茲に於て危機は眼前に迫り井戸川班長以

下、最早や脱るゝ能はざる死地に陥らざるを得なかつた、露兵は丘陵に散開して射撃を開始した、其兵數を知る能はざるも我が隊に比すれば少くも七八倍の優勢を示せるものゝ如くであつた、我が隊も平地及び支那家屋に隠れて應戦したるも敵は漸次兩翼を擴げて我が隊を包圍せんとした、事こゝに到りては殆んど全滅の外はない、井戸川班長は叫んで曰く。

『こゝは俺れが引き受けた、諸君は一刻も早く脱出して再擧を計つて呉れ、諸君の脱出を容易ならしめんが爲め、俺れは敵に向つて切り込むぞッ』

剛毅果斷の井戸川班長は決死の覺悟に眼を怒らし劍を提げ馬を蹴つて敵兵目掛けて乗り出さんとした、此の時班員某々はツト馳せ出で馬前に立ふさがりながら謂つた、

『イケません、班長こそ一刻も早く脱出して下さい、私共が茲處を引受けてロスキーめらを喰ひ止めます、班長たるアナタはこんな場合に一命を棄つることは出来ません、サー早く脱出せられよ』

『イヤ諸君の好意は感謝に堪へないが我輩はドウしても諸君を見棄てるワケに往かない、サー俺れに委せて呉れ、俺れは腕の續く限りロススキーを相手に戦ふのだ』

『班長、何んです、アナタ一人を見殺しにすることは出来ません、ソレでは私共も御一所に敵に斬り込みましょう』

『一寸待つて呉れ、ソレでは斯ふしよう、運を天に委せ皆んな一所に切り抜けることにしよう、〇〇君先頭に馬を飛ばせよ、我輩殿りとして馬を飛ばす、サー根限り馬を乗り倒すまで西南に向つて疾驅せよ』

實に死地に陥れる彼等の態度や、日本男兒本來の面目を發揮したものであつた。班長井戸川は部下を救はんが爲め自ら一命を投げ出さんとした。部下は班長を救はんが爲め、死地に踏み止らんことを熱望した。互に身命を投げ出して他人を救はんことを欲した。優勢なる敵を眼前に望みながら互に死出を争ふが如き、眞に戦場の花であつた。

斯くて死地に陥れる井戸川班は死地を脱せんが爲め食はず飲まず不眠不休、二日間露國ドシコサツクの追蹤を受けながら、漸くにして安全地境に飛び込むことが出来たのであつた。井戸川將軍(二十五年後に於ける)當時の事を追懷して曰く、

『人間も死を決心すれば、何物か恐ろしからんやで、當時我輩は無論一死以て部下を救はんとする決心であつた。然るに部下も亦一死以て我輩を救はんとする決心で、我輩は心の中で泣いたのであつた人の

心は死に臨んで始めて其偉大なることを知る』

幾度か死地に入出入したる井戸川班は武運強くして一人の戦死者を出さず、奉天大會戦後に於て某所に集合の上解散したのであつた。

津久井班も亦露軍の右側方面に出没して盛んに敵軍を攪亂した。同班は遠く法庫門附近に活動し主として露軍の兵站線を突撃しつゝあつた。然るに或る日、兼て密派し置ける支那人細作は津久井班長に告ぐるに、某地方に於て露國商人群なるもの潜入し來り穀物類牛豚其他馬糧など多大の買入れを爲し居れる旨を以てした。茲に於て津久井班は直に活動して某地方に向ひ出發した。先づ密偵を放つて彼等の舉動を探らしめたるに、露國商人群なるものは凡て露國將校下士官等の變装して潜入し居れることが明白と爲つた。是等の露國軍人は蒙古各地に潜入して盛んに食料其他の物資を徴發的買収を試みつゝあつた。彼等

は十數日を費して多大の買収を爲し數十輛の馬車其他に積込んで窃かに其本部に輸送しつゝあつた、茲に於て津久井班は彼等を途中に待ち受け一舉捕獲する策動を立てたのである、斯る強敵の伏在するを知らざる露人等は支那人苦力等を促して輸送を急がしめた、或る日の早天、突如丘陵に現はれたる津久井班は猛然として露人等を襲撃した、變装したりとは言へスラ一魂を有する露國軍人等であつた、彼等は忽ち應戦し茲に日露變装隊の混戦を見るに至つた、露國軍人等如何に勇なりと雖も豈に我が日本武士の勇氣に及ばんや、接戦の後ち或は斬られ或は逃走して遂に津久井班の大勝利と爲り多大の物資は馬車其他と共に同班に捕獲せられたのであつた。

津久井班の班員として常に勇敢なる行動を以て知られたる某君は後日、當時の接戦に就て左の如く語つた。

「ロスキー等は澤山の物資を徴發し又は買入れて數十臺の馬車荷車等にて輸送中であつた、僕等は早朝途中に要撃するに決し津久井班長の如きは特に意氣昂然たる様子であつた、僕は今度こそロスキー二三人を斬りたいので前夜夫れとなく日本刀に磨きを入れたのである、サテいよ／＼翌朝彼等を攻撃したるにロスキー等も頗る勇敢に應戦した、僕は先頭に進み先づ一撃を支那人苦力に加へた、斯くに見たる護衛の露人は直に拳銃を放つて僕を斃さんとした、然るに武運強くも彈丸は帽子をかすめたまで、何等の負傷を被らなかつた、僕は日本刀を引き抜いて彼の肩先きに斬り込んだ、ウンと力を込めて斬り下げたので彼は馬から落ちて平太張つた、僕は更に僕に向つて斬り掛かれるロスキーを相手に二タ打ち三打ち打ち合つた、自慢じやないが僕は黄な面組(劍道甲組)の一人だ、氣合と共に打ち込んだ

る一本は、物の美事にロスキ一の面部を割り附けた、彼は馬から落ちて地上に座しながら僕が再び斬り附けんとするを見て両手を合せて拜んだのであつた、而も事ここゝに到りては救くるワケに往かない否な敵愾心に燃へつゝありし僕等なれば、此奴め死んで仕舞へと叫びながら難なく斬り殺したのであつた、其他班長の如きも三四人を仕留め各々腕試めしに及第して凱歌を揚げて引取つた、如何にも勇壯なる話であるが、斯る戦闘談は他の各班に於ても少からざりしや勿論であつた、彼等志士の面々は非戦闘員ながら孰れも戰鬥的氣分に燃へつゝあつた、左れば學生中に修業したる劍道又は柔道や乗馬を實地に體驗せんことを欲し、班長の抑制にも拘らず、強いてロスキ一を斬らんとする傾向があつた、我れ彼を斬らざれば、彼れ我れを斬らんとする生死交代の場合なれば、勢ひ斯る傾向を帯ぶるに至るや、

勢ひ己むを得ざる成行きであつたと思ふ。

篠田班も亦某方面に活動して幾多の勳功を奏した、同班出征中の珍談として後日同班員某の語れる處は左の如きものであつた。

「篠田班長は沈着温厚の君子人であつた、酒は勿論花柳の遊びも殆んど知らざる位ひの品行方正であつた、然るに同班員の面々は一二の外、揃ひも揃つて左手黨の猛者で北京出發の際は、殆んど宿醉未醒の體たらくであつた、彼等は約一週間好物の酒に親しまざりし爲め、恰も親の仇を探がすが如き熱心を以てアルコホール飲料を物色しつゝあつた、十日目の夕刻いよ／＼蒙古境界の或る村落に到着し篠田班長外一名は甲所の旅舎に其他の班員左手黨の面々は乙所の旅舎に分宿することゝ爲つた、乙所の旅舎に止宿せる班員連は何よりも先づ高粱酒を命じて久々にて枯腸を潤ふしたのであつた、彼等は既

に臨戦地境近く入り込めることを忘れ、盃を重ねて痛飲した、田舎酒の爲め間もなく酔ひ心地と爲つた、頭腦を犯せる高粱酒の悪る酔ひは彼等をしてグテングテンに酔臥せしむるに至つた、是より先き篠田班一行の同地方に入り込むや、同村落の支那人等は其異様の服装と武器類を携帯せるを見て、大に驚異し是れ蒙古馬賊の一群なる可しと疑ふたのであつた、就中乙所の旅舎主人は彼等の傍若無人なる舉動を怪しみ、テツキリ匪賊群に相違なしと信じ、之を村落駐在の支那軍營に密告した、茲に於て支那軍營の將校一名兵士數十名は直ちに旅舎に踏み込んだ、見れば異様の服装に武器類を室内に散亂せしめたる五名の壯漢が前後不覺に酔臥中であつた、支那將校は兵士等に命じて酔臥中の壯漢を一々後ろ手に縛り上げ、室内の武器類を室外に持ち出した、乙所旅舎に於ける匪賊捕縛の事件は忽ち村落中の

評判と爲つた、支那人有志等も旅舎前に集り、團練其他の支那人等も亦旅舎前に來りて喧騒しつゝあつた、甲所の旅舎に安らかに眠れる篠田班長は、門外の騒ぎに眼を覺まし直に支度を整へて何事の起りしやを探知せんとした、騒ぎはドウやら班員五名の止宿したる乙所旅舎に發生したる模様であつた、篠田班長は愕然として驚き自ら彼等の旅舎に乗り込んだ、隨從の支那人某と共に乙所の旅舎に到り見れば、豈に計らんや、班員五名は支那軍人の爲めグル／＼巻きに縛り上げられ今や將に銃殺せられんとする危機一髪の場合であつた、篠田班長は支那人通譯をして支那將校に我等は大日本の軍人なる旨を傳へしめ直隸總督袁大人の公許を得て當方面に旅行中なることを説明せしめた、茲に於て支那將校兵士等は大に驚ろき全然誤解なりし旨を陳謝し班員等の繩を解き旅舎主人を處分することゝ爲つ

た、酒の爲め將に一命を失はんとしたる左手黨の面々は爾來、篠田班長の禁酒命令を守り全然アルコール飲料を近附けなかつた、流石の豪傑連も出征中の一大失策として、凱旋後に於ても當時を追懐し酒盃を恨めし相に眺めて苦笑する位ひであつた、而も酒と一命とを交換せんとしたる當時の班員中、今日現に生存し居れるは僅かに中島比多吉(關東廳翻譯官)一人で、他の井深彦三郎、奈良崎八郎、松本菊熊等は班長篠田少佐と同じく、既に白玉樓中に這入つたのであつた、特別任務班の大奮闘は如上の珍談を以て略々其梗概を想像することが出来る、遠く北滿方面に向へる横川班の消息や果して如何、

露國側より觀たる特別任務班

青木大佐企畫の特別任務班に關しては、開戦の初期露國側に知られ

て居なかつた、然るに意外にも露軍の右翼及び鐵道線路は蒙古馬賊若くは支那匪賊群の襲撃を蒙るに至つた、彼等の活動は最も勇敢且つ大膽であつた、其出沒自在なる、全然從來の馬賊や匪賊等に見る可からざる整然たる策戦振りであつた、茲に於て露軍の幹部は大に狼狽して彼等の活動其他に關する内偵に努力した、各方面の情報及内偵の結果、彼等の活動は日本士官等の指揮する處で、而も是れ北京公使館附武官青木大佐の企畫したる特別任務班なることを知つたのであつた、流石の露軍參謀部も機先を制せられたので後れながら應急策を施すの外なかつた、露軍は容易ならざる日本特別任務班の大活動に由り、夫れ／＼對策を講じたのであるが、先づ其右翼方面を援護する爲め、特に騎兵旅團を配備し、更らに鐵道線路守備の爲め約二個師團を増兵した。

露軍參謀部は其右翼方面の警備を嚴にすると共に左翼方面即ち朝

鮮國境附近に對して新に吉林馬賊や長白山馬賊等を買收して策動せしむるに至つた、露國マドリヨフ中佐は自ら是等の馬賊團を指揮し日本軍の右翼側面を攪亂せんが爲め最も勇敢に活動した、我が軍事當局に於ても豫め花田仲之助中佐所謂花大人と歌はれたるを主盟とする鴨綠江特別任務班を編成したるを以て、露國マドリヨフ中佐に對抗して我が鴨綠江軍と策動した、花田中佐の指揮したる特別任務班は我が川村鴨綠江軍の最右翼に連繋して遠く長白山附近より間島方面に出沒して露軍の左翼を攪亂し、時にマドリヨフ中佐の馬賊團と衝突して接戦混闘を交へたこともあつた、然れども彼我馬賊團の活動は遂に我が花田中佐の指揮せる馬賊特別班の優勝に歸し、さすがのマドリヨフ中佐も勢ひ壓伏せられざるを得なかつた。

夫れ斯くの如く日露兩軍は戦局の發展と共に正兵以外に幾多の奇兵を放つて、互に味方の勝利を計らんとした、而も露軍の士氣に比すれば我軍の士氣旺盛にして全軍決死的精神に燃へつゝあつた、左れば青木大佐の放てる特別任務班の如きは各方面共に死あつて生を知らざるの活躍を試み、露軍の右側方面に多大の脅威を與ふるに至つた、當時露軍總司令官クロバトキンは其根據を奉天に置き沙河の陣地を固守して多々益々兵力の集中を計りつゝあつた、北滿の哈爾賓より南下する滿洲鐵道は歐露よりの軍隊と多額の物資其他の輸送に全能力を傾注した、則ち哈爾賓奉天間の鐵道線路守備は最も嚴重を極めたるも、我が特別任務班の爲め、或は鐵橋を爆破され或は線路を破壊され或は停車場に放火せられ或は兵站倉庫を焼却せられつゝあつた、特別任務班の外、我滿洲軍に於て更に編成したる挺進騎兵隊の如きも亦大膽不敵の突進を以て敵軍の右側面を攪亂し若くは露軍の斥候部隊と白兵戦

を交へて撃退したこともあつた。

敵將クロバトキンは我が特別任務班や挺進騎兵隊の活動に對し、胸中頗る煩悶を覺へたるものゝ如く再三命令を發して右側方面警戒の兵力を増加せしめたのであつた、之が爲め露軍の戰鬥力を減少せしめ我が滿洲軍の作戰計畫に多大の利便を與へ、我軍奉天の大勝利に少からざる効果を及ぼしたのであつた、哈爾賓奉天間の露軍右側面に於て然り、若し夫れ更に遠く東清鐵道線則ち露支國境の滿洲里より海拉爾齋々哈爾を経て哈爾濱に到る鐵道線路及露軍後方の兵站線にして、何等かの脅威を受けんか、露軍の狼狽や蓋し異常なものであると思ふ、而も其脅威なるものが、若し日本側の策動に出でたりとせんか、露國の滿洲軍幹部は必死と爲つて之が對策に努力し、或は多大の兵力を割いて背面の警備を嚴にせざる可からざるや察す可しである。

後年、露軍參謀ゴンドツチ中佐よりクロバトキン大將への報告なるもの發表されたるが其報告中の一節に我が特別任務班に關する當時の狀況が詳記せられて居た、其要領を摘記すれば實に左の通りの報告であつた。

『日本大本營の作戰計畫中に支那の中立地帯を犯して露軍の右側背を攪亂せんとする企畫が立てられて居た、右の企畫は日本の北京公使館附青木大佐又は天津駐屯軍司令官仙波少將の手に立案され、日露開戦と共に山海關を策源地としたる形跡がある、其企畫は日本將校中より選拔されたる五十餘名の少佐大中尉等を幹部とし支那側の勢力家(直隸總督袁世凱)を通じ滿蒙各地の匪賊頭目十數名を買收し彼等の部下約六千名(匪賊頭目一名の部下は地方に由り或は一千名内外或は三百餘名を有するが故に頭目十五名とすれば少くも五

千以上に上り或は一萬内外なりしならんを以て特別任務挺進軍を編成した、是等の滿蒙匪賊軍に對しては日本大本營より少くも百五十萬元を支出して其頭目等を買収したものと、如く、而も兵士一名に對し月給五十元を給與し新式小銃及數百發の彈丸を交付した、彼等は活動前豫め所定の訓練を受けたるを以て之を一般普通の支那軍隊に比すれば頗る優秀にして精銳なる軍隊を見るに至つたのである、是より先き直隸提督馬玉崑は日本側の有力なる將軍(公使館附武官山根武亮少將のことならん)の依頼に由り自己の勢力下に在る滿蒙各地の匪賊頭目等に對し日本の買収に應ぜんことを勸告した、馬提督は既に日本より三十萬元を受取り其半額を頭目等に交付したのであつた、然るに馬提督は新直隸總督袁世凱の下に在るを欲せず遂に辭職して姜桂題新に其後任と爲つた、斯る事情の爲め滿蒙匪賊

の頭目等は爾來日本側の懷柔に服し遂に青木大佐等の特別任務隊に参加したのであつた。

特別任務挺進軍は七八の部隊に分たれ各部隊には隊長以下幹部五六名の日本將校あり、其部下に頭目二三名匪賊等八百乃至一千二百名宛附屬したるもの、如く全員凡て乘馬にして頗る規律の嚴なる様子があつた、「フアークメン」附近に現はれたる部隊は約一千名の兵數にして我が東部西伯利第三軍團第七師團第六大隊と衝突した、大隊長サイモフ中佐は敵を包圍せんが爲め其兩翼を延長し漸次包圍の形勢を進めた、然るに敵の一部隊約三百名の蒙古馬賊は我が露軍の中央突破を敢行し最も猛烈に突進して來た、茲に於てサイモフ中佐は地形の不利と左右兩翼の離隔とに由り已むを得ず、後進して敵の銳鋒を避くるに至つた、此の戦闘に於ける敵の行動を観察すれ

ば蒙古馬賊と想はるゝ集團の大多數は日本の騎兵隊なりと見做さ
るを得ない、其勇敢なる戦闘振りは到底馬賊等に見る可からざる
特殊の行動を伴ふたのである、實に警戒す可き日本の特別任務隊と
言はなければならぬ。

三月初旬より五月末に到る三ヶ月間に於ける我が右翼方面に活動
したる日本馬賊隊の與へたる損害は、實に意外に甚だしいものがあ
つた、則ち鐵道線路の破壊せられたるもの三十七ヶ所、鐵橋及暗渠の
破損及爆破せられたるもの二十四ヶ所、我が兵站倉庫の放火せられ
たるもの十三ヶ所、我が買收物資の捕獲せられたるもの約四百五十
萬留に相當、我が軍隊將校の戦死十八名、負傷三十餘名、下士卒の戦死
三百六十餘名、負傷七百八十名に上り、其他我軍に附屬せる支那馬賊
及人夫等の死傷數百に上つた、以上の損害以外に未だ報告を受けざ

るもの少からざるは勿論である、正確に調査すれば我軍の蒙れる直
接間接の損害は、頗る大なるものあるや想像す可しである、日本馬賊
隊(特別任務班に對する悪口)の損害も亦少からざる可しと雖も、彼等
は絶へず支那人密偵を放つて我軍の動靜を探知せしめ、我軍の不用
意に乗じて襲撃するを以て、其の損害は必ずしも大ならざるものゝ
如くである、四月二十日、鄭家屯附近に於ける彼我の衝突は最も激烈
であつた、當日早曉我東部西伯利騎兵第六旅團の三個中隊は我右翼
方面警戒の任務を帯びカザゴフ少佐指揮の下に一村落に前進して
其村道を左折せんとした、然るに日本馬賊隊の一部隊約五百騎は夜
陰に乗じ同村落を占領したるものゝ如く、我騎兵隊の前面に集合し
て將に出動せんとしつゝあつた、茲に於て彼我兩軍は不意の衝突に
驚きながらも直に馬足を並べて突撃した、露兵の長槍は日本兵を馬

上より突き落とし、日本兵の長剣は露兵を斬つて落し、兩軍互に馬を突き入れ、劍槍相ひ打ち、悲惨なる血戦を見るに至つた。折しも日本軍の一隊村落の後方より現はれ、露國騎兵隊の退路に迫らんとする形勢あり、之が爲めカザコフ少佐は急退離隔を命じ、死傷者を遺棄したる儘北方へ背進せざるを得なかつた。此の戦闘に於ける露國側の死傷は將校六名、下士卒百八十九名を出したるが、日本側の損害も亦露軍に劣らなかつたこと、想ふ。然るに後日の報告に依れば、鄭家屯附近の戦闘に参加したる日本馬賊隊は、所謂特別任務隊の馬賊隊を主とせずして、新に編成せられたる永沼騎兵挺進隊を主力とせるものであつた。日本の特別任務隊は永沼挺進隊と策動して、露國騎兵隊の退路に迫らんとする擬勢を示したに過ぎなかつた。

夫れ斯くの如く日本特別任務隊の活動は、我露軍の右翼方面に脅威

を興へ、且つ我軍に多大の損害を蒙らしめて居る、之を撃滅し我が右翼の安全を計らんとせば、先づ移動警戒隊を増加せなければならぬ。鐵道線路は勿論各兵站線の守備兵を増加し、特別搜索隊を編成して滿蒙境界に配置し、絶へず巡邏せしめ、以て敵の出動に備へざるを得ない、更に必要なるは支那人密偵多數を使用する一事である、是等の密偵を各地に潜入せしめ、或は遠く山海關天津各地の密偵と連絡して最も詳細に敵状を探知せしめ、以て對策を施さなければならぬ、或は左翼方面に於けるマドリヨフ中佐と同じく、我が右翼方面に於ても滿蒙馬賊を募集して一大馬賊隊を編成して、敵の特別任務隊に當らしむるも亦妙策であると思ふ、而も若し此の策を採用せらるゝに於ては小官(ゴンドッチ)中佐奮つて其隊長たらんことを志願致さざるを得ないのである。』

亦以て如何に露軍幹部が狼狽し且つ對抗策に苦心せるかを推察することが出来る、我が特別任務班の出没自在なる大活動は、露軍をして頗る過大なる部隊に想像せしめた、我が特別任務班に附属したる蒙古馬賊團は、其全部に於て多くも五六百名を越へない位ひであつた、然るに前記露軍參謀ゴンドツチ中佐の報告には少くも六千以上の大部隊であると思はれつゝあつた、六千以上一萬内外の馬賊隊が各方面に出没して露軍の右翼方面を攪亂しつゝありと想像したるが故に、露軍幹部の狼狽も亦無理からぬ次第であつた、哈爾濱より奉天間の鐵道守備兵を増加せしめ、且つ警邏騎兵其他を増大せしめたる爲め、野戦の戰鬥力を減少したるや、勢ひ已むを得ざる事態であつた、則ち我が第四第五第六(後ち第三班も加はつた)各班の活動は少くも露軍の三箇師團以上の戰鬥力を牽制し、我が滿洲軍の作戰行動に多大の利益を將來したのであつた、

露軍の右側方面に出没したる我が特別任務班の活動狀況は、夫れ阻せしめ、露軍の兵站線を攪亂して、有形無形の損害を與へた。

露軍の右側方面に出没したる我が特別任務班の活動狀況は、夫れの機關を経て我が青木大佐の手許に届ける報告に依り、其消息を知ることが出来た、是等の報告を受取れる青木大佐等は或は喜び或は憂ひ或は祝し或は考へ込んだることあるも、而も大體に於て頗る心を安んじたのであつた、然るに第二班横川一行の消息は殆んど何等の報告に接しなかつた、彼等は二月十八日頃北京出發以來、三月二日赤峯に到着までの消息を最後に全然其の消息を絶つたのであつた、四月に於ても之を知ることが出来なかつた、五月に入つても其消息全く不明であつた。